幸徳秋水述『廿世紀之怪物帝国主義』の韓国語訳について

権　　純　哲*

On the Korean Translation of Kotoku Shusui's *Imperialism: A Monster of the 20th Century*

KWON, Soon Chul

はじめに
Ⅰ　『朝陽報』について
Ⅱ　『朝陽報』連載「論二十世紀之帝国主義」について
　１．翻訳者不明
　２．抄訳かつ未完訳
　３．訳文体裁の刷新
　４．連載中断の理由
　（１）朝陽報社の方針との関係
　（２）幸徳秋水の韓国認識
　（３）ビスマークに対する認識
　（４）『愛国精神』
Ⅲ　翻訳の特徴
　１．固有名詞の翻訳
　２．誤訳の例
　３．文脈に従う意訳
むすび

はじめに

幸徳秋水述『廿世紀之怪物帝国主義』は、1901年４月 20 日警醒社書店より発行され、同年５月10日に再版が、1903年10月10日に三版[1]は発行されたが、その約３年後、韓国で翻訳紹介された。その韓国語訳とは、1906 年６月に創刊された雑誌『朝陽報』の第二号より第九号まで総８回連載され、その後、最終号第十二号までその続は掲載されなかった。幸徳秋水述『廿世紀之怪物帝国主義』とその韓国語訳については、拙稿「卞榮晩訳『世界三大怪物』と『二十世紀之大惨劇帝国主義』について」で言及したのだが、その補編として本稿では、未完の韓国語訳を取りあげ、若干の考察を行いたい。

従来、韓国近代思想史研究において『朝陽報』掲載の日本幸徳秋水述「論二十世紀之帝国主義」は注目されてはいた[2]が、本格的研究は未だなされていない。その理由としては、未だ『朝陽報』が覆刻されていないがゆえの資料へのアクセスの不便さや、連載中断に因る研究資料としての不充分さが指摘できよう。本格的研究には踏み切れず、敬遠されてきた現状を打破し今後の研究に資すべく、『朝陽報』連載「論二十世紀之帝国主義」全文を活字化し本稿に付録した。訳文と原書を対照できるように、幸徳秋水述『廿世紀之怪物帝国主義』をも併記しておいたので、参照されたい。

ちなみに、本稿の基本資料である『朝陽報』は、韓国国立中央図書館所蔵の複製本と高麗大

＊ クォン・スンチョル
教授：韓国思想史・東アジア近代学術思想

学校中央図書館所蔵の複製本のコピーを用いたが、韓国独立記念館資料室が公開しているPDF版電子ブックをも参照した。幸徳秋水述『廿世紀之怪物帝国主義』は『幸徳秋水全集』第三巻（明治文献 1968）所収を用いたが、引用の際の書体や表記は主として国会図書館近代デジタルライブラリー公開の同初版の PDF 版によった。また、神崎清解説の中央公論社日本の名著『幸徳秋水』（1970）と山泉進校注の岩波文庫『帝国主義』（2004）をも参照した。

Ⅰ　『朝陽報』について

『朝陽報』

『朝陽報』[3] は、沈宜性を編集兼発行人にして朝陽報社より 1906 年 6 月 25 日に第一巻第一号を創刊し第二号を同年 7 月 10 日に出し、毎月十日と二十五日の二回発行とした。「論説」「教育」「実業」「談叢」「内地雑報」「海外雑報」「詞藻」「小説」の項目によって構成され、当時にはやる各種の啓蒙団体発行の学会誌と構成内容に大きな違いはないが、『朝陽報』は経営母体の団体[4] を持たず、読者の購読料をもって経営する商業雑誌であった。同様の雑誌としては同じく 6 月創刊の『家庭雑誌』、同年 11 月に創刊された最初児童雑誌『少年韓半島』がある。

朝陽報社

『朝陽報』によると、同年 10 月になって社長張應亮・総務員沈宜性・主筆張志淵・会計員朴聖欽・書記員林斗相という社中任員組織の社告が第九号に、第十号には賛成員決定の社告があり、朝陽報社の雑誌社としての体制が整備されつつあったことを示している。また 1907 年 1 月には版形をも変え月刊に変更した第二巻第十二号を出し、その社説では「本社の目的は亶ら民智を敬導して国権を扶護して以て我大韓の光を世界列邦の間に於いて発揮するに在り」と、社の目的を再度強調していた。そして創刊以来、相当の意欲を以て発刊し続けた『朝陽報』の読者に対して「ああ、国内報舘の設が紛然と日に興り然後に文明の智識を進める可きであり、国民の程度を高める可きである。此の競争劇烈の日に当って艱危な岌嶪には、熱涙の汪々たるを禁じえない。一日と雖も宜しく早く覚悟して前進すると、豈劣敗の悲境を免脱するに非らざるか。所以に本社の設立が全国雑誌の首倡を為して以て今日の発展に至ったのである。若し今年の内に愈々益々拡張させ発展させるならば、則ち窃かに謂う、文明の程度が又昨年と比べて一層進む可きである、と。愛読諸君子はそれ勉旃せよ。」とまで呼びかけていた。しかし、これが最終号となった。

通知もない発行中止には、何らか当局の圧力があったと想像はできても、確かな廃刊理由は不明である。期待通り購読料が回収できず経営に苦しんでいる様子が社告に確認でき、それが一因をなした可能性はある。『朝陽報』創刊後、多くの学会誌が刊行されるようになり、統廃合の必要もあったと考えられる。これは、編集兼発行人沈宜性の活動からも推測されるが、確認できていない。

編集兼発行人沈宜性

編集兼発行人沈宜性[5] は、1906 年 4 月に尹孝定、張志淵、林珍洙、金相範などとともに発起人として「大韓自強会」[6] 設立に参加し活動する最中の 6 月に『朝陽報』を創刊した。その翌月に『大韓自強会月報』が創刊されたが、沈宜性は、第五号（1907.1.25）に「論我教育界の時急方針」を、第十一号に「工業理財説」（訳）と「歴史及地理の概論」（訳述）、第十二号に「精神の教育」と「政治学の国家主義」（訳述）を、

第十三号（1907.7.25）に「論師範養成」と「工業理財術」（第十一号続）、「政治学総論」（承前）を寄稿している。つまり、『朝陽報』最後の第十二号刊行とほぼ同時に『大韓自強会月報』第五号に最初の記事を掲載してから訳述記事が続き、『朝陽報』廃刊後の沈宜性の活動をうかがうことができる。

「大韓自強会」は、1907 年 7 月ハーグ事件の責任を追及して高宗を強制退位させ、それに反対する全国的示威運動が激烈化するなか、8 月 19 日強制解散させられる。会長が尹致昊（1865～1945）[7] であり、顧問には大垣丈夫（1862～1929）[8] が就いていた。沈宜性は、1919 年 6 月に大韓協会によって創刊された『大韓民報』の財政的後援するなど、愛国啓蒙運動のリーダーの一人であった。

主筆張志淵

主筆張志淵（1864～1921）[9] は、1894 年進士となり、翌年 8 月閔妃殺害事件が起こると、反日義兵決起を訴える檄文を作成、全国各地に発送し、1896 年の俄館播遷が起こると、高宗の還宮を求める万人疏を起草した。その一方、史礼所の職員として『大韓礼典』編纂に係り、翌 1897 年には内部主事となったものの、すぐ辞職。同年 7 月に独立協会に加入して活動した。1898 年 9 月創刊された『皇城新聞』記者として活躍し、11 月には万民共同会の幹部として活躍、独立協会と万民共同会が解散させられた時には逮捕投獄された。1899 年『時事叢報』の主筆に任じられるが、すぐ辞職、広文社設立に編輯員として参加し丁若鏞の『牧民心書』『欽欽新書』などを刊行した。

1901 年には皇城新聞社長に就任、1905 年 11 月 17 日に締結された保護条約を批判糾弾する論説「是日也放声大哭」を掲載して逮捕投獄され、新聞は押収停刊処分となった。『朝陽報』『大韓自強会月報』には創刊号から寄稿したが、『朝陽報』の廃刊や大韓自強会の解散にあうと、1908 年 2 月には弾圧を避けてウラジオストクに亡命、『海潮新聞』主筆となるが、財政難によって廃刊、中国各地を流浪、8 月に帰国。だが『海潮新聞』記事が問題となり、憲兵隊に逮捕されすぐ釈放。1909 年 1 月に「嶠南教育会趣旨文」を書き、編輯員として同教育会を支援、2 月には大韓協会の「呈政府文」を作成し、1909 年 10 月『慶南日報』主筆に招かれ、日本の韓国併合を糾弾する黄玹（1855～1910）の「絶命詩」を掲載、これによって廃刊され、郷里に蟄居し 1921 年世を去った。

以上で保護国時代、雑誌の生成消滅の一例として『朝陽報』と、その主要な関係者の歩んだ道をうかがうことができた。

Ⅱ　『朝陽報』連載「論二十世紀之帝国主義」について

本稿で取りあげる幸徳秋水述『帝国主義』の韓国語訳は『朝陽報』の「論説」欄に連載された。「論二十世紀之帝国主義」は第一回掲載時のタイトルであるが、これから『朝陽報』連載韓国訳全体を指す時、これを用いることを断わっておきたい。

以下、連載訳文の全体的特徴を整理しておきたい。

１．翻訳者不明

まず、指摘しておきたいのは、翻訳者の記名がない点である。じつは、『朝陽報』掲載記事には、記者の名前が記されていないものが多い。記名があるのは、主筆となる張志淵だけと言ってもよいほどである。

また、付録した翻訳文をみればわかることだが、翻訳には、漢文調の強い部分とそうでない部分が混在している。また後述するように、連載途中に体裁の変化があり、誤解、誤訳も散見され、複数の人が関わった可能性も考えられる。いずれにせよ、翻訳者を推定できる材料は確保されていない。

２．抄訳かつ未完訳

第二号「論説」の「開化原委」「自助論」「支那衰頽の原因」に次ぐ最後の記事として「論二十世紀之帝国主義　日本　幸德秋水述」というタイトルの下に、第１回目記事が掲載された。

原書にある内村鑑三の「『帝国主義』に序す」や秋水自身の「例言三則」の訳はなく、「第一章緒言」をも記さず、冒頭から「盛美哉라（や）、所謂帝國主義의（の）流行也여（よ）。勢如燒原ᄒᆞ야（にして）不可嚮邇니（なり）、世界萬邦이（が）皆其膝下에（に）慴伏ᄒᆞ야（して）贊美之ᄒᆞ며（し）崇拜之ᄒᆞ며（し）而奉持之ᄒᆞ로다（なり）。」と書き出しており、翻訳掲載に際して組まれる著者や記事に対する紹介説明もない。

また、冒頭の文に続く訳文をみると、原書から省略された箇所もみられ、第九号に至るまで省略箇所が散見される。以下、全訳文において省略された原文箇所をまとめて示しておきたい。

『廿世紀之怪物帝国主義』初版は、章の下に「其一」「其二」とあり、その下に記される段落ごとに〇をつけている。また上部欄外にある頭書は、本文中の該当する行の頭上に記されているが、頭書のない段落もある。本稿においては、便宜上〇に段落の順番をつけておいた。

まず「第一章緒言」において省略された段落は、三番目の段落③が訳されていない。〔何の徳あり何の力ある〕という頭書があり、平時忠（1127～89）の言葉が引用されている。

「第二章愛国心を論ず」については、「論愛国心」というタイトルの下、第三号から第七号まで全５回連載されたが、以下の箇所が訳されず、省略されている。「其二」〔虚誇虚栄〕という頭書の下、岩谷松平（1850～1920）について述べた段落⑩が、「其三」の頭書〔自由競争〕〔動物的天性の挑撥〕のある段落⑫、「其四」の頭書〔明治聖代の愛国心〕のある段落④が、「其五」においては頭書〔普仏戦争〕の段落⑪と〔独逸現皇帝〕の⑱、「其六」においては段落⑦、頭書〔日本の軍人〕の段落⑨から、〔我皇上の為め〕の⑩、段落⑪⑫⑭、〔軍人と従軍記者〕の⑮、段落⑯⑰⑱⑲⑳までが、「其七」においては頭書〔愛国心の物たる如此し〕の①、〔人類の進歩ある所以〕の②、③④、〔進歩の大道〕の⑤、⑥⑦が訳されていない。

「第三章軍国主義理を論ず」においては、「論軍国主義」というタイトルの下、第八号と第九号の 2 回連載のみであり、「其一」においては頭書〔五月人形三月雛〕の段落④と⑧が、「其二」の段落⑥が省略され、「其三」においては段落③最初の一文の訳「古代希臘의（の）列邦中에（に）好戰而長於戰者ㅣ（が）莫如斯巴爾達而彼果有一技術, 文學, 哲理, 等의（の）傳播耶否아（か）。（未完）」までが翻訳され、「未完」のまま終わったのである。

以上でみたように、『朝陽報』連載「論二十世紀之帝国主義」においては、原書『廿世紀之怪物帝国主義』の全五章のうち、「第三章愛国心を論ず」の「其四」「其五」「其六」と、「第四章帝国主義を論ず」の「其三」③の後半以降「其六」まで、そして「第五章結論」は訳されず、残ったのである。このようにして、『朝陽報』には『廿世紀之怪物帝国主義』本文全 134p.のうち 58p.までが翻訳掲載された。

省略するに何か判断基準があったかも知らないが、このような傾向が認められる。たとえば、日本に関する具体的な記述がある箇所の省略が

目立ち、ビスマーク関連段落もある。また雑誌の性格上、重複を避け簡略な記述に努めたがための省略も認められる。

３．訳文体裁の刷新

第八号の連載７回目「論軍国主義」になってからは、訳文の体裁に変化があらわれた。すなわち、原書の「其一」「其二」などを「第一節」「第二節」と訳し、訳文の段落ごとに△、○をつけ、見出しをつけている。さらに訳文にみえる独自的な工夫の例としては、原書の頭書〔モルトケ将軍〕（其一⑤）は「平和は夢想中美夢」という見出しに、〔疾病の発生〕（其二⑦）は「人民が軍人的」という見出しに替わっているのであり、また頭書のない「其二」の段落⑨には「反省利害」という見出しを新たにつけている。

このような体裁上の刷新は、翻訳担当者や編輯関係者の意欲の変化をあらわすものとみてよいだろう。だが、連載はその次回で終わった。

４．連載中断の理由

ついに考えなければならない問題は、翻訳の連載が第九号（1906.11.10）の８回目を以て中断した点である。それに関連する説明などが『朝陽報』には記されておらず、いまのところ、中断の理由を資料上確認することはできない。

以下、連載中断の理由を探るために参考になりうることがらをいくつかあげてみたい。

まず、時を同じくして、社中任員組織の社告（第九号）と賛成員決定の社告（第十号）により、朝陽報社の経営布陣が整えつつあったので、社の方針との関連について考える必要がある。つぎに、幸徳秋水の韓国認識の問題との関連について、そして、『朝陽報』に同時に連載された二つの記事との関係について考察していきたい。

（１）朝陽報社の方針との関係

時代状況からみて幸徳秋水の『帝国主義』での批判的分析と主張が朝陽社関係者にはどのように受け止められていたであろうか。その手がかりを第二巻第十二號 1907.1.25「社説」[10] から探ってみたい。一部は前述と重複の嫌いがあるが、取りあげたい。

「社説」においては、朝陽社の『朝陽報』発行目的が「民智を敬導して国権を扶護」するにあるとし、愛読者には「愛国精神が油然感発して生気が眉宇間に勃々とする」ことを期待している。また国内に様々な雑誌社が設立され、文明知識の進歩と国民レベルの向上をより一層図っていかなければならない。激しい競争時代に国家が危機にあって劣敗の悲境から脱出するには、一刻も早く覚悟して前進する必要がある。そのため朝陽社として今年の内に拡張発展していくことを誓っているのである。

このような「社説」にみえる朝陽報社の使命やヴィジョンから、幸徳秋水「愛国心」や「軍国主義」に対する批判的分析と主張がもはや受け入れがたいものになっていたと考えられるのである。

（２）幸徳秋水の韓国認識

幸徳秋水の『帝国主義』には「朝鮮」も「韓国」も登場していない。

幸徳秋水の朝鮮認識の問題については、1905年６月25日付堺利彦宛獄中書簡の「予が出獄後に於ける慾望は甚だ多し、…北海道或は朝鮮に田園を買ひ、数百人の農夫と理想的生活を為して、静かに天真を養ふ其四也」とあるように、その意識の欠如が先行研究[11]で指摘されているが、ここでは『帝国主義』の中の記述に注目したい。

まず、関連する幸徳秋水の認識をうかがえる一例として、第四章「其一」において頭書〔大帝国の建設は切取強盗〕〔武力的帝国の興亡〕に

続く段落⑦を挙げることができよう。

在昔シピオ、カルセーヂの廢跡を見て歎して曰く、羅馬も亦一日如此くならんと、然り眞に一日如此くなりき。成吉士汗の帝國今安くに在る乎、奈勃翁の帝國今安く在る乎、神功の版屬今安くに在る乎、豐公の雄圖今安くに在る乎、唯た朝露の消て痕なきが如きにあらずや。

＊Scipio Africanus：BC236～184。

＊カルタゴ Carthago←Qarthadasht 新しい都市の意。

征韓論、壬午軍乱、甲申政変、または日清戦争、ことあるたびに朝鮮問題・韓国問題と騒ぐなか「歴史」から持ち上げられた国家主義の代表的広告塔が神功皇后の三韓征伐、豊臣秀吉の朝鮮出兵の物語であった。これらの偉人の侵略ヴィジョンである「版図」や「雄図」を「朝露の消て痕なきが如き」ものと述べ、大日本帝国が夢見ている虚像を暴露批判しているところに幸徳の『帝国主義』の意義を認めることができる。どころが、それは大日本帝国の隣国への侵略占領状況に対する批判には展開されず、むしろそれに便乗する幸徳秋水の没知覚性が、先の書簡によって明らかになったのであり、彼こそ侵略主義者という批判[12]のある所以でもある。

また第四章の最後「其六」段落⑦においては、頭書〔日本の帝国主義〕の下「而して今や我日本も亦此主義に熱狂して反らず。十三師団の陸軍、三十万噸の海軍は拡張されたり、軍人の胸間には幾多の勲章を装飾せり、議会は之を賛美せり、文士詩人は之を謳歌せり。而して是れ幾何か我国民を大にせる乎、幾何の福利を我社会に与へたる乎。」と述べた後、頭書〔其結果〕の付く段落⑧では、つぎにようにいう。

八千万円の歳計は數年ならずして三倍せり、臺灣の經營は占領以來一億六千万の費を内地より奪ひ去れり、二億の償金は夢の如く消失せり、財政は益す紊亂せり、輸入は益す超過せり、政府は増税に次ぐに増税を以てせり、市場は益す困迫せり、風俗は益す頽癈し、罪惡は日に増加せり、而も社會改革の説は嘲罵を以て迎へられ、教育普及の論は冷笑を以て遇せらる、國力日に竭き民命日に蹙る。若し如此くにして滔々底止することを知らざる數年ならしめば、我は信ず、東洋の君子國が二千五百年の歴史は、黄粱一炊の夢たらんのみ。嗚呼是れ我日本に於ける帝國主義の功果に非ずや。

そして、「故に我は断ず、帝国主義なる政策は、少数の慾望の為めに多数の福利を奪ふ者也、野蛮的感情の為めに科学的進歩を沮礙する者也、人類の自由平等を殲滅し、社会の正義道徳を戕賊し、世界の文明を破壊するの蠹賊也と。」と第四章を結んでいる。

以上のように、幸徳秋水は「科学的進歩」とともに「人類の自由平等」「社会の正義道徳」「世界の文明」を尊重する立場から、日本帝国主義に熱狂する軍人、政治家、文人の問題をも指摘し、台湾経営の財政上不条理や国内における社会改革と教育普及という課題の歪曲をも指摘している。つまり、帝国主義批判に際し幸徳秋水が意識していたのは、まずは植民地争奪戦を拡げている西洋列強であり、また日清戦争の勝利によって大陸への侵略意欲を増していた大日本帝国の内政や社会問題であった。そのためか日清戦争後、頻発していた日本人の韓国での非文明的・暴力的行為に目を向けていない。

韓国における日本帝国主義の侵略実態に対する告発と批判は、幸徳秋水の『帝国主義』出版2年後に世に出た山口義三著『破帝国主義論』において展開されたことは、前稿で紹介した通

りである。

（３）ビスマークに対する認識

関連記事の一つは、「論二十世紀之帝国主義」と同時に『朝陽報』第二号から第九号、第十一号まで連載されていた「ビスマークの清話」である。タイトルからも想像できるように、偉人としてビスマークの逸話などを紹介する記事であるが、ビスマーク批判に徹する幸徳の主義主張とは相容れない内容が多々あるという点である。この記事の存在が翻訳掲載中断につながった可能性は排除できないと思う。

さらに、原書のビスマーク関係段落の省略もあるうえ、後述のように翻訳にも相当のブレが認められ、「論二十世紀之帝国主義」読者には相当の混乱をもたらしたと思われる。後述するⅢの２と３において、ビスマーク認識をめぐる原書と訳文との相違に関連する内容をうかがうことになる。

（４）『愛国精神』

つぎに関連する記事としては、第九号に初めて掲載された「法人愛彌兒拉の愛国精神訣（ママ）」に注意したい。翻訳者記名のないまま、第十二号（1907.1.25）まで連載された「愛国精神談」は、のちに完訳され 1908 年李埰雨訳述・南嵩山人校閲にて中央書館より出版された『愛国精神』になる。校閲の南嵩山人は『朝陽報』主筆の張志淵であり、この両者を対照してみたところ、『朝陽報』連載記事に修正を加えたものと判断される。最終号まで掲載された「愛国精神談」がのちに完訳され出版されたことは、連載中断となった幸徳秋水『帝国主義』とは好対照となる重大な事実である。

ちなみに、学会誌『西友』第七号（1907.6.1）から九号まで盧伯麟訳「愛国精神談」が連載されている。『愛国精神譚』の第二部までの翻訳にあたるが、『朝陽報』記事と重複し、文体や訳語の類似点も見られ、関連性の詳細な検討が要るが、ここで立ち入ることはできない。いずれにせよ、当時韓国知識人の愛国心、愛国精神に対する思いがどれほどであったかをうかがえる一例である。

ようするに、当時大韓帝国のおかれた状況から、『愛国精神譚』の翻訳連載、さらにその出版は必要であったのであり、それゆえ幸徳秋水『帝国主義』の翻訳連載の中止がむしろ意味のある決断であったと考えられるのである。

後述するが、原書『帝国主義』の一貫した「愛国心」批判に対する訳文においては、相当のブレが見受けられる。したがって、このような翻訳記事が読者にどの程度歓迎されたかの問題もあるが、読者以前に翻訳者自身が原書をどのように理解し、また連載を通じて読者に何を伝えようとしていていたかについても、詳細な分析検討が要る。

ついでに「法人愛彌兒拉の愛国精神談」の原書についてつけ加えておこう。

韓国語訳の原書である『愛国精神譚』は、当初陸軍歩兵中尉大立目克寛・同少尉板橋次郎が、フランス軍将校ラヴィッス、エミール・シャルル Lavisse, Émile Charles 著 *Tu seras soldat, histoire d'un soldat français*（Paris, Colin, 1888：君は兵士になる：フランス兵士史話）[13] の中から軍事教育に有益な小談話を抜粋翻訳したものである。すなわち、1891 年『偕行社記事』第五十二号・第五十三号・第五十四号の附録として三回にわたって刊行され、同年に同社によって単行本として出版された。1897 年再版が、1899 年に三版が、1912 年に四版が出たので、韓国語訳の原書は再版か三版であろう。

Ⅲ　翻訳の特徴

いままで、『朝陽報』連載「論二十世紀之帝国主義」の全体的特徴としては、翻訳者は無記名のゆえ不明であること、抄訳かつ未完訳であること、訳文の体裁上の刷新があったこと、案内もなく連載が中断されたことについて論じてきた。

ここでは、実際の翻訳文にみられる特徴について、固有名詞、誤訳の例、文脈にしたがった意訳という点から述べていきたい。

１．固有名詞

まず、翻訳文に出る固有名詞を原書での表記と対照してみたい。以下においては、国名・地名、人名、原書のカタカナ語の順にして、訳文表記←原書表記に記し、原語や補注を加えておいた。

德意志、德義志 ← 獨逸　Deutch
俄國 ← 露國　Russia
法國 ← 佛國　France
澳大利 ← 澳太利　Austria
意國、伊大利 ← 伊太利　Italy
美國 ← 米國　America
非律賓 ← 比律賓　Philippine
英吉利、英國 ← 英國　England
普魯士、普魯西 ← 普魯西　Prussia
阿非利加 ← 阿弗利加　Africa
斯巴爾達 ← スパルタ　Sparta
奥法戦爭 ← 澳佛戦爭　Austria と France
克利美亞戦爭 ← クリミヤ戦爭
　Crimean War　＊1853-1856
奥普戦爭 ← 澳普戦爭　Austria と Prussia
　＊1866
普法戦爭 ← 普佛戦爭　Prussia と France
　＊1870-71
俄土戦爭 ← 露土戦爭　Russia と Turkey
　＊1877-1878
呼亞鎖達 ← ファショダ　Fashoda
　＊Suden 南部の地名。
馬卑亞尼亞 ← アビシニア　Abyssinia
　＊Ethiopia の旧称。
　＊ア⇒マ馬、シ⇒ア亞：誤読
支蘭士瓦路 ← ツランスワール　Transvaal
白多路羅（地名）← ペートルロー　Peterloo
烏阿德路羅（地名）← ウオートルロー
　Waterloo
白多羅呼伊路德（地名）← ペートルフイールド　Peter's Field
白多路羅 ← ペートル　Peter　＊路：衍字
馬路沙斯 ← アルサス　Alsace
　＊誤読：ア⇒マ馬
羅林 ← ローレン　Lorraine
巴黎 ← 巴里　Paris
俾斯麥公、俾士麥克公 ← ビスマーク公
　Otto von Bismarck
哥魯利志 ← コルリッヂ　Coleridge, Samuel
呼阿志 ← フォックス　Fox, Charles
莫魯多將軍 ← モルトケ將軍
　Helmuth Karl Bernhard von Moltke
馬罕大佐 ← マハン大佐
　Mahan, Alfred Thayer
拿破侖、拿破崙 ← 奈勃翁　Napoleon
耶羅德 ← ヘロット　helot
　＊ヘ⇒ヤ耶：誤読
亞波士德路 ← アポストル　apostle
　＊使徒、最高聖職者：誤解
夫巳氏 ← ブランデー　brandy
　＊洋酒：誤解

以上のリスト最後の三つは、翻訳者の誤解・誤読によってあてられた、間違った訳語である。また「馬卑亞尼亞」、「馬路沙斯」は、「ア」を「マ」

と読み違った誤訳である。これらの単語はスキップして読んでも文脈から意味を拾うことはできると思われるが、読者に原書の内容がどの程度、伝わったのだろうか。

また、原書の「ペートルロー」について「白多路羅（地名）」と訳しているが、このピーターール一事件とは、ワーテルローの戦いでナポレオンを打ち負かした2ヶ月後の1819年8月16日、マンチェスターのセント・ピーター広場で、議会改革と穀物法の廃止を要求する数万人の労働者の集会に、騎馬警官隊が出動し 11 名が死亡、数百人が負傷させられた民衆虐殺事件を指し、Peterloo Massacre (or Battle of Peterloo) という。Peterloo とは、Waterloo での勝利後の St. Peter's Field での虐殺事件を皮肉って、Peter と Waterloo を合体して作った造語であり、厳密に言えば、地名ではない。幸徳は、ロバートソン『愛国心と帝国』よりこれを引用していた[14]。

国名・地名・人名については、それぞれ慣用の表記を用いているが、ただオーストリアについては、当時「墺太利」が一般的表記であった。

２．誤訳の例

ここでは、誤訳の例をあげて検討したい。版組ミスによる間違いの可能性もあるが、同様に扱うことにしたい。なお、誤字、脱字、衍字と思われる場合には、その旨を記しておいた。また韓国語訳文の引用においては、漢語や漢文は訳文通りにし訳文の語尾や助詞などのハングルのみ日本語に直訳し、漢字は一部を除き常用漢字に改めた。附録をも参照されたい。

（１）第一章④の「国家経営の目的は」を「国家の目的を経営する者は」と訳したが、これは不注意による誤訳であろう。

（２）第二章其三⑤の「古希臘に於ける所謂ヘロットなる奴隷」を、訳文では「ヘ」を「ヤ」と誤読したうえ固有名詞のように「古希臘の所謂耶羅徳の奴隷者」とした誤訳については、すでに指摘した。しかし、つぎのような用例が原書にあるので、これが十分防ぎ得た誤訳であったと思われる。

スパルタの奴隷（ヘロット）は自由あるを知らず、権利あるを知らず、幸福あるを知らず、其主の為めに駆使され鞭撻され、而して戦に赴て死す、戦に死せずんば即ち其主に殺戮さる、自ら誇て以為らく国家の為め也と。我は史を読んで常に彼等の為めに泣けり、今此の心を以て亦我兵士の為めに泣く。**第三章其六⑪**

然れども今はスパルタの時代に非ず、我皇上は自由と平和と人道を重んじ給ふ、豈に其臣子をしてヘロットたらしむるを希ひ給はんや。**同⑫**

つまり、奴隷に「ヘロツト」とルビを付けた用例があり、また「ヘロツト」を以て説明する記述もあるので、全文を読んでから訳したならば、奴隷を意味することは、充分に推理できたはずである。すでに誤った翻訳をしたためか、この二つの段落は訳されず省略された。

（３）第二章其三⑪「社会が適者生存の法則に従つて、漸く進化し発達し」を「社会公理に適足した者は生存の法則のみであるが、進化が日漸発達し」としたのは、明らかな誤訳である。

（４）第二章其四⑤の「文明の道義は之を恥辱とす」について「訳[⇒亦]文明之道徳を則恥辱之するが」と訳されているが、「訳」が「亦」の誤植だとしても、「文明之道徳を」は「文明之道徳は」にしなければ、文脈が合わない。

（５）同其五⑦

彼れ日耳曼の統一者、獣力のアポストル、鉄血政策の祖師は、其深謀遠計の第一着手として…

↓

彼日耳曼の統一した者は其獣力を実由したの

であり、盖亜波士徳路は鉄血政策の祖師であり、其深謀遠計の第一着手者が…

これは、前述の「アポストル apostle」を人名と誤解したゆえに生じた誤訳である。したがって訳文では、ビスマークを激烈に批判する原書の趣旨が完全に消えている。

（６）同上⑮

国民が国威国光の虚栄に酔ふは、猶ほ個人のブランデーに酔ふが如し。

↓

国民が国威と国光の虚栄に酔したのが夫巳氏の俾斯麥公に酔したのと恰如し

同じく「ブランディー」を人名と誤読したゆえに生じた意味不明の誤訳である。ここの原文もビスマークを批判するものである。

（７）第二章其六⑧

一面に於て五百金千金を恤兵部に献せるの富豪は、一面に於て兵士に販るに砂礫を混するの鑵詰を以てす。一面に於て死を期せりと称するの軍人は、一面に於て商人の賄賂を収むること算なし

↓

軍費の重資を富豪に収恤（或五百金/或一千金）し、或は兵士が混沙礫而販鑢詰し、一面則軍人の死期を促し、又一面則商人の賄賂を索して

この訳は、文脈に大きな支障はないにしても、原書の明瞭な論調を損傷する誤訳と指摘せざるを得ない。

（８）第三章其二⑨

是れ国民の軍人的教練の完全なるが為めに非ずして

↓

無非国民軍人的教練の結果也であり

訳文では、否定文を二重否定にして肯定している。軍備強化、徴兵制、軍事教育、軍国主義に対する批判の論調を全面的に承認できない訳者の思いがあらわれたかも知れない。

（９）第三章其二⑩

唯だ其結果の恐怖すべきを洞見し、其狂愚なるを悟れるに由るのみ

↓

其結果の恐怖が不難洞見であり、惟狂愚者は不悟其由來也である。

〔戦争減少の理由〕について述べる原書に対してこの訳は、その由来を悟れない「狂愚者」を強調する意図的誤訳かも知れない。これに継ぐ⑪とその訳をみてみたい。

彼等強国の相戦はざるは之が為めのみ、徴兵の教練が尊敬心を養成せるの功果に非ざる也。見よ彼等は今や大に其武を亜細亜、阿弗利加に用ゐんとするに非ずや。

↓

彼等が果然強国の為に相争するのではなく、徴兵の教練によって其尊敬心を養成した功果であり、彼等が果然其武力を亜細亜阿非利加に大用しようとするのではなく

つまり、⑩に継ぐ⑪では、戦争の結果の恐怖すべきを洞見しその狂愚さを悟ったので列強が互いに戦争をしないだけであり、〔戦争減少の理由〕は正にここにある、徴兵制の教練によって尊敬心が養成されたからでは決してない、というのが原書の主張である。そして列強がアジアとアフリカで行おうとする武力行為の現状を見よと訴えているのだが、訳文においては、〔戦争減少の理由〕をめぐる議論を理解したうえで行われた訳と認めることはできない。

(10) 第三章其三①の「軍国主義者は曰く」について、「彼等が倡国民主義者が曰く」と訳して、「軍国主義者」を「国民主義者」に改めている。その後の訳文に無理や間違いはない。すなわち、戦争によって人民が鍛錬され、偉大な国民になり、美術、科学、工業なども戦争に鼓舞刺激されて発達し、古代の文芸興隆の時代も多く戦争後にあったという〔戦争と文芸〕の関連性の主

張を「牽強附会」だと正しく翻訳してはいるのである。だが、武力に対する絶対的否定を貫く幸徳秋水の考えに同調できず、戦争であれ文芸であれ国民主義に収斂できればという思いが訳者にあったがためにあえて「国民主義」と訳したとも思われる。

３．文脈に従う意訳

ここでは、文脈にしたがった意訳と思われる例をいつくかあげておきたい。ここでいう文脈とは、訳文においてのことであり、翻訳者自身の思想や見方によって翻訳している実態が散見され、それに即した言い方であることを断わっておきたい。意図的誤訳と思われる箇所もその一例である。

（１）第二章其二②

世界万邦の仁人義士は、ツランスワールの為めに其勝利と復活を祈り、比律賓の為めに其成功と独立を祈れり、其敵国たる英人にして然る者あり。其敵国たる米人にして然る者あり。

↓

世界万邦の仁人義士は、必ず支蘭士瓦路の為に復活の勝利を祈り、必ず非律賓の為に独立の成功を祈り、英人を視ることを敵国の如き、美人を視ることを敵国の如くするだろう。

訳文では、後半の二文において英国、米国内にいるとした「仁人義士」の存在は認めず、イギリス人とアメリカ人すべてが世界の仁人義士から敵国人と見做されているのだという主張になっている。

それゆえ、次の③の訳文では、「愛国心」が「軍国主義」に変質していく心理状況の動きに改めて翻訳しているのである。

今の愛国者や国家主義者は、必ずやツランスワールの為めに祈るの英人を以て、愛国の心なしと罵らん、比律賓の為めに祈るの米人を以て、愛国の心なしと罵らん。然り彼等或は愛国の心なかる可し、然れども高潔なる同情、惻隠、慈善の心が確に之れ有り。然らば即ち愛国心は、彼孩兒を救ふ底の人心と一致せざるに似たり。

↓

今の名為愛国心者は此と反して純然に国家主義者になったが、何則か。英人は必ず支蘭士瓦路の為に其勝利を祈らず、美人は必ず非律賓の為に其独立を祈らないのは、すべて自己の愛国心を損うか慮ることである。故に彼等の愛国心が無いとするのは不可だが、然し彼等の高潔な惻隠慈善の心を究めると、果然其同情を表示し難い。然則其所謂愛国心者は奈何に孺子を救うことの如き熱念が無くついに一致できない。

訳者は、自分の愛国心を損なうかと慮るために、ツランスワールのためにも、比律賓のためにも祈らないのだといい、愛国心が国家を絶対視するもの「国家主義者」になった証しとして理解している。したがって後半部において、彼らに「愛国心」が無いとは言えなくても、その「高潔な惻隠慈善の心」を認めることはできず、彼らの「愛国心」は「孺子を救うことの如き熱念」のない異質のものと断定している。

孟子の「惻隠の心」を彼らにも認めつつも、これとは一致しないと彼らの「愛国心」を批判する原書に対して、訳者は、普遍的道徳心を前提にし、これに基づかない自国中心主義への変質を指摘している。

（２）第二章其三⑤

彼等が其主の為めに戦ふや、忠義実に比なかりき、勇敢実に比なかりき、曾て一たび戈を倒まにして其自由を得んと欲するなかりき。

↓

彼等が其主権者の為に出戦することを不厭する。其勇敢と忠義が実無比於此だが、然しつ

いに一度倒戈して其天賦した自主の権を恢復することを不知なり。悲夫悲夫よ。

ここでは、彼らの「其主」を「其主権者」と訳し、「其自由」を「其天賦した自主の権」と訳した点が注目される。この段落は、前述した「ヘロット」を「耶羅徳」と誤解した文の後半にあたるが、古代ギリシャの主人について訳者は、奴隷の「天賦した自主の権」を「主」るものとし、奴隷について「天賦した自主の権」を恢復することを知らず、権利回復のための闘争をしなかったことを悲しんでいる。原書に感動した訳者の思いが伝わってくる。前稿でも言及したが、このような天賦人権に対する理解には朝鮮儒学独得の思想伝統が溶け込んでいる。

（３）第二章其四①

自家愛す可し、他人憎む可し、同郷人愛す可し、他郷人憎む可し、神国や中華や愛す可し、洋人や夷狄や憎む可し、愛す可き者の為めに憎む可き者を討つ、是を名つけて愛国心と云ふ。

↓

自己を愛するは可いが、他人を悪むは不可なり、同郷人を愛するは可いが、異郷人を悪むは不可なり、自国を愛するは可いが、外国を悪むは不可なり。万が一其所愛の為に其所悪を討つ者は豈可く愛国心と謂うか。

〔洋人夷狄の憎悪〕という頭書の下、「神国」意識と「中華」意識から「洋人」「夷狄」を憎悪する心を「愛国心」という日本人の歴史認識に由来する帝国主義を批判する幸徳の原文だが、訳文では、他者に対して憎む「可し」とした原文を「不可」と改め、人間愛の普遍性を貫き「愛国心」批判をより厳しくしている。

（４）第二章其五⑰

独逸の哲学は尊崇すべし、独逸の文学は尊崇すべし、而も我は決して独逸の所謂愛国心を賛美する能はず。

↓

徳意志の哲学と文学は尊崇せず、ただ徳意志の所謂愛国心だけ尊崇するが、吾輩は此に対して決して賛美しないのだ。

これは、すでに指摘した誤解の例「ブランデー」のある冒頭の一文を省いた後半部分であるが、訳文では国民の哲学や文学の愛国心との関係の不可分性が強調され、原書に反論しているような訳になっている。

（５）第二章其五㉑は「其五」のまとめのような段落であるが、内容の核心は、頭書の〔哲学的国民〕に非哲学的な事態を演じさせた罪人、ビスマーク批判にある。

吁嗚極めて哲學的（フイロソヒツク）なる國民をして、各種の政治的理想中、極めて非哲學的（アンフイロソヒツク）なる事態を演ぜしめたるはビスマーク公の大罪也。ビスマーク公若し微りせば、獨り獨逸のみならず、獨逸を宗とせる歐洲列國の文學、美術、哲學、道德は、如何に進歩し如何に高尚なる可かりしぞ、曷んぞ狺々相喰む豺狼の態を、廿世紀の今日に存せんや。

↓

嗚呼라.極哲學的의國民으로써各政治的理想을具ᄒᆞ야非哲學的의事態를極演ᄒᆞ면,即俾斯麥의罪人만될분不是라,凡德意志를宗ᄒᆞ든歐洲列國의其文學家와美術家와哲學家及道德家의罪人됨을未免ᄒᆞ리니,其高尚ᄒᆞᆫ志意가何在而但爲狺々相噬ᄒᆞᄂᆞᆫ豺狼의態度ᄒᆞ야尚存於二十世紀之今日也오.

【訳】ああ、極めて哲学的な国民として各政治的理想を具し非哲学的な事態を演じ極めるならば、即ちビスマークの罪人になるのみならず、およそドイツを宗とした欧州列国の文学家と美術家と哲学家および道徳家の罪人になることを未だ免れないだろう。その高尚な意志がどこにあるのか。そして、ただ噛み殺しあう豺と狼の態度を為してなお二十世紀の

今日に存在するのか。

原書の「ビスマーク公の大罪也」が、訳文においては「ビスマーク公の罪人」と反転され、罪人どころか偉人としてのビスマーク観が端的に示されている。

（６）第三章其二②

マハン大佐の言巧ならざるに非ず、而も我は其甚だ論理に違へるを見る。

↓

自吾観之すると、其論の達[⇒違]理たるが頗多なのだ。

「第三章軍国主義」の「其二」で幸徳秋水は「英米諸国の軍国主義者、帝国主義者のオーソリチー」マハン大佐を取りあげている。段落②では頭書〔軍備と徴兵の功徳〕の下でマハン大佐の発言を長く引用した後、幸徳秋水自身その巧みさは認めるものの、論理上の違反を指摘し、次の③から「其二」最後の⑪までその「巧みさ」をさばき、「論理に違へる」ことをさまざまな例を示しながら批判しているのだが、ここの②の訳文では、「其論の達理たる」と正反対のコメントに変わっている。

「達」は「違」字の誤植と認められるが、両極端の意味であるゆえ、読者への影響は計り知れないものがある。さらに②のマハン大佐の長い発言が極めて短く意訳され、次の③の訳文も同様である。前節の誤訳の例にも第三章其二⑨と⑩をあげておいたが、つぎにみる⑤の訳文においても同様の問題がある。

（７）第三章其二⑤

現時欧洲大陸の徴兵制を採用せる諸国の兵営が、常に社会主義の一大学校として現社会に対する不平の養成所たるは、較著なる現象に非ずや。我は社会主義的思想の隆興を希ふ、而して之を養成すといふの故を以て、決して兵営を排斥する者に非ず。而もマハン大佐の言の如く、兵士の教練は長上に対する服従と尊敬の美徳を養ひ得べしと云ふの謬妄なるを知る可からずや。

↓

現時欧洲大陸の徴兵制が諸国の兵営を採用した者だが、常出於社会主義の一大学校である。其現社会に対して皆其不平した動機を養成するのが非較著な現狀歟。吾人が社会的主義の思想隆成を希望することは、決して兵営を排除することに有意ではなく、馬罕大佐の言から論じても兵士の教練は僅以服従敬長にて為美徳というので、世之君子が自有定論なり。

この訳文後半は、マハン大佐の発言に対して「自有定論」と訳して、「謬妄」とした原書の批判が中立化されているのである。訳者はむしろマハン大佐の「兵士の教練は長上に対する服従と尊敬の美徳を養ひ得べし」という主張に同感できた反面、それを「謬妄」とする秋水の議論に賛成できなかったに違いない。そこには、幸徳秋水が「隆興を希」う社会主義思想に対する訳者の理解が関係すると思われる。つまり、前半部にある徴兵制による教育訓練の兵営が兵士の現社会に対する不平の養成所であり、社会主義の大学校であるとした原文に対する訳文の「其不平した動機を養成する」と、「常出於社会主義の一大学校」と、「社会的主義の思想隆成を希望する」という表現から考えると、当時の世界に流行っていた社会主義思想に対する十分な理解が訳者にあったか疑わしい。

たとえば、③の「戦闘を習ふて秩序と尊敬と服従の徳を養ふは、今日の如く権力衰微し紀綱弛廃するの時に当つて尤も急要也。」というマハン大佐の主張に対して幸徳は、次の④で「妄なる」と批判し反論するが、その訳がまた問題である。

マハン大佐が権力の衰微、紀綱の弛廃と云ふ者は、蓋し社会主義の活性を指す者也。其妄

なるや言を須たず。

↓

馬罕所謂権力衰微紀綱廃弛者は、盖社会主義の発生を指すというが、其言の妄は固不足論であり

この訳文が「妄」と指摘したのは、「盖社会主義の発生を指す」すなわち原文「蓋し社会主義の活性を指す者也」であって、マハン大佐の主張である原書とは逆の論旨になっている。

第三章の訳でみたように、幸徳が軍国主義の権威として取りあげて批判したマハン大佐の主張が訳文においては、肯定的に読まれる一方、マハン大佐の主張から「社会主義」発生を論証しその「隆興を希ふ」幸徳のねらいは、むしろ否定あるいは矮小化されていると言わざるを得ない。

ちなみに、当時、マハン大佐著書の翻訳として、水交社訳・東邦協会発行『海上権力史論（上・下）』（1896.11：*The Influence of Sea Power Upon History, 1660-1783*、1890）があり、水交社幹事肝付兼行の序文には、マハンに「馬鴻」という漢字をあてている。同じく水交社訳・東邦協会発行『仏国革命時代海上権力史論（上・下）』（1900.4、8：*The Influence of Sea Power upon the French Revolution and Empire, 1793-1812*、1892）も出版されていた。このような水交社や東方協会の活動を幸徳が意識していたことは想像しがたくない。

以上、文脈に従う意訳について検討してきたが、翻訳者自身の見方や考え方が投影された翻訳である点を指摘することができる。言い方を換えれば、意図的誤訳とも言えよう。改めて考えてみると、『帝国主義』に底流する「社会主義」を希求する幸徳秋水の先進性や、幸徳秋水における朝鮮韓国認識の欠如という幸徳秋水思想の限界について、翻訳者が気付いていたのかどうか、気付いていたとしても、翻訳者にとっては、この翻訳そのものが学問上、思想上においてややこしく重い課題であったに違いない。

むすび

以上、本稿では、幸徳秋水述『廿世紀之怪物帝国主義』の抄訳であり不完全訳である『朝陽報』連載の「論二十世紀之帝国主義」を取りあげて、翻訳連載の実態と中断の理由について検討し、また翻訳内容の特徴について原書と対照しながら分析してきた。いっぽう、未完全訳である「論二十世紀之帝国主義」そのものを研究資料として提供すべく、本稿に全訳文を付録したのである。「論二十世紀之帝国主義」の研究資料としての価値や評価は、本稿の課題とするものではないが、以上の検討によって明らかになった事実と今後の課題について、あらためて確認しておく必要があると思う。

以下、本稿での検討内容を簡単に要約しておきたい。

第一、「論二十世紀之帝国主義」は、幸徳秋水述『廿世紀之怪物帝国主義』の翻訳物としての意義は認めがたいものの、「意図的誤訳」にみられる翻訳者のねらいについては、詳細な検討の価値があると考える。たとえば、幸徳秋水の「愛国心」批判に共感しつつ反発しようとする翻訳のブレ、同様なものが「軍国主義」「徴兵制」に対する幸徳秋水の批判に対する訳でもみうけられた。このブレは翻訳者の違和感や悩みの現われでもあり、その結果としてある「意図的誤訳」の具体的な検討が今後の課題となる。これは『廿世紀之怪物帝国主義』の思想的先進性に由るものでもあるが、当時韓国のおかれた状況に由来するものでもある。

第二、翻訳記事の連載中断の理由について三つの可能性を提示してみたが、当時韓国知識人に『廿世紀之怪物帝国主義』がどのように理解され

たか、具体的に言えば、帝国主義、社会主義という当時尖鋭の思想に対する理解の程度を測り得る一つの端緒がここにあるように思われる。

第三、明治期の社会主義思想が大韓帝国に翻訳紹介された事実の意味は大きいが、その事例はあまりにも少なさすぎる。これは、緊迫してきた韓国の思想状況そのもののあらわれであった。つまり、当時大韓帝国の知識人は、日本の軍事的侵略、政治的干渉と支配を先導し、またそれを理論的に支えていた帝国主義に対抗しなければならなかったし、またそれに対抗し得る主体としての思想を用意しなければならなかったのである。抑圧的な帝国主義に抵抗するための思想連帯を模索することが当時を生きた日韓知識人の課題であったはずだが、現実を動かした連帯運動が「合邦論」であった歴史を顧みると、朝鮮問題・韓国問題に対する幸徳秋水の沒知覚とは好対照となる山口義三『破帝国主義』の如き、近代日本社会主義における韓国問題認識また韓国観の問題をさらに追究していく必要がある。

本稿を通じて浮き彫りになった課題は、以上のようなものと今整理しておきたい。

【付記】本研究は、平成 22～24 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「大韓帝国における国家学・反国家思想の受容に関する研究（課題番号：22520070）」の研究成果の一部である。

注

1　三版の巻末に付録されていた「本書に対する批評」が初期社会主義研究会の「兆民と秋水―没後 100 年と『帝国主義』」を特集した『初期社會主義研究』第 14 号 2001 に収録されている。同研究会の「幸徳秋水」を特集した同第 12 号 1999 をも参照されたい。

2　崔起榮「韓末知識人の反帝国主義論－卞榮晩を中心に」『国史館論叢』47,1993（崔起榮著『韓国近代啓蒙思想研究』一潮閣 2003 所収）を参照。

3　『朝陽報』に関する研究には、劉載天『韓国言論とイデオロギー』文学と知性社 1990 収録の「『朝陽報』と民族主義」（1970 年代発表論文の再録）、イ・ユミ「1900 年代近代的雑誌の出現と文明談論―雑誌『朝陽報』を中心に」『現代小説研究』第 26 号、2005 年 6 月、韓国現代小説学会がある。だが、いずれも幸徳秋水や「論廿世紀之帝国主義」に言及していない。

4　鄭晋錫『韓国言論史』ナナム出版、1990 には、「大韓自治協会の機関誌」とあるが、いまのところ確認できない。

5　沈宜性の人物情報については、まとまった記述は見当たらない。ここでは、韓国学中央研究院公開の『韓国民族文化大百科事典』（http://encykorea.aks.ac.kr/）収録記事の中の関連内容をあつめて整理した。

6　李鉉淙「大韓自強会について」『韓』4-12、1975 を参照。

7　外村大「植民地に生きた朝鮮人にとっての日本－民族指導者尹致昊の日記から見えてくるもの」『日本の科学者』2010 を参照。

8　池川英勝「大垣丈夫について－彼の前半期」『朝鮮学報』第 117 輯 1985、同「大垣丈夫の研究－大韓自強会との関連を中心にして」『朝鮮学報』第 119・120 輯 1986 を参照。

9　具滋赫『張志淵』東亜日報社 1993 と前掲『韓国民族文化大百科事典』収録項目「張志淵」による。

10　参考のために関連社説の原文を引用しておきたい。

蓋本社之目的은亶在乎敬導民智ᄒᆞ며,扶護國權ᄒᆞ야以發揮我大韓光於世界列邦之間者니,迨此新年新月之初ᄒᆞ야國家維新之休命이將届ᄒᆞ고,諸君子迓新之景福이無疆이라.本社ᄂᆞᆫ不勝歡喜之拱일ᄲᅮᆫ더러,且况自昨年六月以來로至于今七八個月之間에特蒙／諸君子愛讀之盛意ᄒᆞ시와,得以發展而維持之ᄒᆞ니,本社之榮幸이顧如何哉아.所以로欲表微忱ᄒᆞ야務圖改善而進步者也어니와,本社之祝望於諸君子者ᄂᆞᆫ惟願益加愛讀ᄒᆞ야梅花雪月之窓에酌栢葉椒香之觴ᄒᆞ고朗讀數葉이면,則愛國精神이油然感發ᄒᆞ야生氣勃々乎眉宇間矣리니,豈不快哉아.有朋遠來之樂이恐無以過此矣라ᄒᆞ노니.

嗚呼라.國內報舘之設이紛然日興然後에文明之智識을可進이오,國民之程度ᄅᆞᆯ可高矣니,當此競爭劇烈之日ᄒᆞ야艱危岌嶪이不禁熱涙汪々이라,雖一日이라도宜早覺悟而前進이라야,豈非免脫於劣敗之悲境者歟아.所以로本社之設立이爲全國雜誌之首倡ᄒᆞ야以至今日之發展者也라.若使今年之內에愈益擴張之發展之則窃謂文明之程度가又比昨平而可進一層矣ㄹ가ᄒᆞ노니,愛讀諸君子ᄂᆞᆫ其勉旃乎哉ㄴᆡ져.

【訳】蓋し本社の目的は専ら民智を敬導して国権を扶護し以て我大韓の光を世界列邦の間に発揮することにあります。この新年新月の初に至って国家維新の休

命がまさに届き、諸君子の新年を迎える景福も無疆でありましょう。本社は歓喜の拱を勝えられないのみであります。またさらに昨年六月以来、今に至るまでの七八個月の間に特に諸君子愛読の盛意を蒙り、以てこれを発展し維持することができました。本社の栄幸は如何に顧みますか。ゆえに微忱を表して務め図って改善し進歩することを欲するのであります。本社の諸君子に祝望するのは、益々加えて愛読することを願うのみでありまして、梅花雪月の窓にて栢葉椒香の觴に酌し数葉を朗読するならば、則ち愛国精神が油然感発して生気が眉宇間に勃々とするでしょうから、豈快くないでしょうか。有朋遠来の楽が恐らく此に過ぎないでしょう。

ああ、国内報舘の設が紛然として日に興り、然後に文明の智識を進める可きであり、国民の程度を高める可であります。此の競争劇烈の日に当りまして艱危なる岌嶪には熱涙が汪々たるを禁じ得ません。一日と雖とも宜く早く覚悟して前進すると、豈劣敗の悲境を免脱することができないでしょうか。ゆえに本社の設立が全国雑誌の首倡を為して以て今日の発展に至ったのであります。もし今年の内に愈々益々拡張し発展していけば、則ち窃かに謂う、文明の程度が又昨年に比へて一層進むべきことを。愛読諸君子よ、勉旃しましょう。

11　飛鳥井雅道「明治社会主義者と朝鮮そして中国」『三千里』第 13 号 1978 春『天皇と近代日本精神史』三一書房 1989、石坂浩一『近代日本の社会主義と朝鮮』社会評論社 1993 の第一章「侵略主義者幸徳秋水の『転向』」（初出：『史淵』46－1・2、1987.5）

12　石坂浩一の前掲書。

13　1901 年出版の *Tu seras soldat, histoire d'un soldat français; récits et leçons patriotiques d'instruction et d'éducation militaires*（君は兵士になる、フランス兵士史話；軍事訓練と教育のための愛国的教訓談）では、日本語訳『愛国精神譚』収録と同じ銅版絵が複数確認でき、日本語訳原書の増補版と思われる。Emile Charles Lavisse は陸軍准将 Général de brigade として第一次世界大戦時 1915 年 6 月 28 日、セーム Seine にて負傷による死亡。

14　山泉進校注『帝国主義』岩波文庫 2004 の語注を参照。

《附録》『朝陽報』連載記事「論二十世紀之帝国主義」と原書『廿世紀之怪物帝国主義』の対照表

『朝陽報』第二号～第九号（全134p.のうち58p.まで訳す）	『廿世紀之怪物帝國主義』（初版本文全134p.）
「論二十世紀之帝國主義」　日本　幸德秋水述	第一章　緒言
盛美哉라.所謂帝國主義의流行也여.勢如燒原ᄒᆞ야不可嚮邇니,世界萬邦이皆其膝下에慴伏ᄒᆞ야贊美之ᄒᆞ며崇拜之ᄒᆞ며而奉持之로다.	①盛なる哉所謂帝國主義の流行や、勢ひ燎原の火の如く然り。世界萬邦皆な其膝下に慴伏し、之を賛美し崇拜し奉持せざるなし。〔帝國主義は燎原の火也〕
夫英國이朝野의信徒를擧ᄒᆞ든狀況과德意志의好戰의皇帝ㅣ其勢力을盡ᄒᆞ야鼓吹ᄒᆞ든事實을見乎아否乎아.且如俄國者ᄂᆞ自稱ᄒᆞ기를自昔으로傳來ᄒᆞ든政策이라不云乎아.若法也와澳也와意也도孰不熱心於此리오마ᄂᆞ但彼則瀛海의美國을隔ᄒᆞ야其主義를不得遂ᄒᆞ고其方針을轉變ᄒᆞ얏고,至若日本ᄒᆞ야ᄂᆞ一自日清戰爭의大捷以來로上下의狂熱이〈火와如ᄒᆞ고茶와如ᄒᆞ며〉軛을脫ᄒᆞ悍馬와恰似ᄒᆞ도다.	②見よ英國の朝野は擧げて之が信徒たり、獨逸の好戰皇帝は熾に之を鼓吹せり、露國は固より之を以て其傳來の政策と稱せらる、而して佛や澳や伊や、〈亦た頗る之を喜ぶ〉、彼米國の如きすら近來甚だ之を學ばんとするに似たり。而して我日本に至つても、日清戰役の大捷以來、上下之に向つて熱狂する、猛馬の軛を脫するが如し。
	【③昔者平時忠誇て曰く、平氏に非ざる者は人にして人に非ずと、今の時に於て帝國主義を奉持せざる者は、殆ど政事家にして政事家に非ず、國家にして國家に非ざるの觀あり。彼れ其れ果して何の德あり、何の力あり、何の貴重すべき有つて、其流行の能く如此きを致せるや。〔何の德あり何の力ある〕】
夫國家의目的을經營ᄒᆞᄂᆞ者ᄂᆞ社會永遠의進步에在ᄒᆞ고人類全般의福利에在ᄒᆞ거ᄂᆞᆯ,彼則不然ᄒᆞ야現在ᄒᆞᆫ頃刻의繁榮과小數된階級의權勢를專圖ᄒᆞ야其國家의主義ᄂᆞ不知ᄒᆞ나니,今日國家의所謂政事家라自稱ᄒᆞ고帝國主義를奉持ᄒᆞᄂᆞ者ㅣ果然吾人의進步를期圖乎야,吾人의福利를經營乎아.	④蓋し國家經營の目的は、社會永遠の進步に在り、人類全般の福利に在り。然り單に現在の繁榮に在らずして永遠の進步に在り、單に少數階級の權勢に在らずして全般の福利に在り。而して今の國家と政事家が奉持せる帝國主義也者は、吾人の爲めに幾何か這箇の進步に資せんとする乎、幾何か這箇の福利を與へんとする乎。〔國家經營の目的〕
吾人의深信無疑ᄒᆞᆫ바ᄂᆞ社會의進步를求코져할진ᄃᆡ,其基礎ㅣ반다시「眞正科學的智識」을待ᄒᆞᆫ後可固ㅣ며,人類의福利를求코져할진ᄃᆡ其源泉이반다시「眞正文明的道德」에歸ᄒᆞᆫ後에可得이며,且其理想은반다시自由와ᄌᆞ못正義에在ᄒᆞᆫ後에可發也오.而其極致ᄂᆞ반다시極[⇒博]愛와平等에在ᄒᆞᆫ後에可成也ㅣ니,盖古今東西를勿論ᄒᆞ고順之者ᄂᆞ榮ᄒᆞ나니,松栢의後凋ᄒᆞᆷ과如ᄒᆞ고,逆之者ᄂᆞ亡ᄒᆞ나니,蒲柳의先零ᄒᆞᆷ과如ᄒᆞ거날,彼帝國主義의政策家ㅣ果然此의基礎와源泉이有乎아.果然此의理想과極致가有乎아.如其然也면則此主義者ㅣ實노社會人類의天國福音이될지니,吾輩ᄂᆞ비록執鞭의事를行ᄒᆞ야도欣慕不已호리라.	⑤我は信ず、社會の進步は、其基礎必ずや眞正科學的智識に待たざる可らず、人類の福利は、其源泉必ずや眞正文明的道德に歸せざる可らず。而して其理想は必ずや自由と正義に在らざる可らず、其極致は必ずや博愛と平等に在らざる可らず。夫れ古今東西、能く之に順ふ者は榮ふ、松柏の凋に後るゝが如く、之に逆ふ者亡ぶ、春の夜の夢の如し。彼帝國主義の政策にして、果して此基礎源泉を有して、而して此理想極致に向つて進む者ならしめん乎、此主義や實に社會人類の爲めに天國の福音也、我は喜んで之が爲めに執鞭の士たるを甘んぜん。〔科學的智識と文明的福利〕
如哉不幸ᄒᆞ야吾의所言과不如ᄒᆞ면,帝國主義의勃興流行ᄒᆞᄂᆞ所以ᄂᆞ非科學的智識이라實迷信也며,非文明的道德이라實狂熱也며,非自由正義極[⇒博]愛平等이라實壓制邪曲頑陋爭鬪也ㅣ니,是等의劣情과惡德이世界萬邦에支配할ᄲᅮᆫ아니라,而其「精神的」「物質的」에皆受其傳染ᄒᆞ야其毒害의橫流ᄒᆞᄂᆞ비深히寒心ᄒᆞᆯ비아니리오.	⑥然れども若し不幸にして、帝國主義の勃興流行する所以の者は、科學的智識に非ずして迷信也、文明的道義に非ずして狂熱也、自由、正義、博愛、平等に非ずして壓制、邪曲、頑陋、爭鬪なりしとせよ。而して假に是等の劣情惡德が、精神的に物質的に、世界萬邦を支配すること如此にして止まずとせよ、其害毒の橫流する所、深く寒心すべきに非ずや。
嗚呼라帝國主義여.汝의今日流行ᄒᆞᄂᆞ勢力이於我二十世紀의天地에쟝ᄎᆞ寂光의淨土를現코져ᄒᆞᄂᆞᆫ뇨.ᄯᅩᆫ無間의地獄을墮코져ᄒᆞᄂᆞᆫ뇨.且進步乎아,腐敗乎아.福利乎아,災禍乎.天使乎아,惡魔乎아.	⑦嗚呼帝國主義、汝が流行の勢力は、我二十世紀の天地を以て、寂光の淨土を現せんとする乎、無間の地獄に墮せんとする乎。進步乎、腐敗乎、福利乎、災禍乎、天使乎、惡魔乎。〔天使乎惡魔乎〕

其眞相과實質이果炫[⇒然]如何ᄒᆞᆫ지,實ᄂᆞ熱心硏究할진져.炫[⇒然]이나現今二十世紀의經營ᄒᆞᄂᆞᆫ人士ᄂᆞᆫ此眞焦頭爛額의急務라할바여날,〈身列〉後進ᄒᆞ야不揣不才ᄒᆞ고呶々不已ᄒᆞ노니,(誰或聽之耶아).	⑧其眞相實質の如何を硏究するは、我二十世紀の經營に任ずる士人に在て、焦頭爛額の急務に非ずや。是れ後進の不才自ら揣らず、敢て呶々の已むなき所以也。〔焦頭爛額の急務〕
論愛國心	**第二章　愛國心を論ず**
我國民을膨張ᄒᆞ고,我版圖를擴張케ᄒᆞ야,大帝國을建設ᄒᆞ고,我國威를發揚케ᄒᆞ고,我國旗를光榮케ᄒᆞᆷ은是所謂帝國主義의喊聲이니,彼等이自家의國家를愛ᄒᆞᄂᆞᆫ心이亦深矣로다.	**其一**　①我國民を膨張せしめよ、我版圖を擴張せよ、大帝國[ｸﾚｰﾀｰｴﾝﾊﾟｲｱ]を建設せよ、我國威を發揚せよ、我國旗をして光榮あらしめよ、是れ所謂帝國主義者[ｲﾑﾍﾟﾘｱﾘｽﾄ]の喊聲なり。彼等が自家の國家を愛するや深し。〔帝國主義の喊聲〕
英國의南阿를伐ᄒᆞᆷ과美國의非律賓을占領ᄒᆞᆷ과德國의膠州를取ᄒᆞᆷ과俄國의滿洲를奪ᄒᆞᆷ과法國의呼亞鎖達을征ᄒᆞᆷ과意國의馬卑亞尼亞를戰ᄒᆞᆷ이即是自己의帝國主義를將ᄒᆞ야行ᄒᆞᆫ바較著의現象이니,盖帝國主義의向ᄒᆞᄂᆞᆫ바ᄂᆞᆫ惟軍備오,軍備의後援되ᄂᆞᆫ바ᄂᆞᆫ則外交ㅣ伴之ᄒᆞᄂᆞ니라.	②英國は南阿を伐てり、米國は比律賓を討てり、獨逸は膠州を取れり、露國は滿洲を奪へり、佛國はファショダを征せり、伊太利はアビシニアに戰へり。是れ近時の帝國主義を行ふ所以の較著なる現象也。帝國主義の向ふ所、軍備、若くば軍備を後援とせる外交の之に伴はざるなし。
其發展의迹에現ᄒᆞᆫ者가所謂愛國心으로써經을作ᄒᆞ고所謂軍國主義로써緯을作ᄒᆞ야織成ᄒᆞᆫ政策이안인가.名稱은비록愛國心이나其實은純然ᄒᆞᆫ軍國主義也ㅣ니,現時列國의帝國主義에共有ᄒᆞᆫ條件이안인가.是以로吾必曰帝國主義의是非利害를拒絶코져할진ᄃᆡ,不可不만져所謂愛國心과所謂軍國主義를向ᄒᆞ야一層檢覈을加히야될줄노認ᄒᆞ노라.	③然り其發展の迹に見よ、帝國主義は所謂愛國心を經とし、所謂軍國主義[ﾐﾘﾀﾘｽﾞﾑ]を緯となして、以て織り成せるの政策に非ずや。少くとも愛國心と軍國主義は、列國現時の帝國主義が通有の條件たるに非ずや。故に我は曰はんとす、帝國主義の是非と利害を斷せんと要せば、先づ所謂愛國心と所謂軍國主義に向つて、一番檢覈なかる可らずと。〔愛國心を經とし軍國主義を緯とす〕
然則今의所謂愛國心이란者ㅣ만일愛國主義가何物됨을知할진ᄃᆡ,吾人이何故로〈一地를擇ᄒᆞ야〉我의國家〈됨을認ᄒᆞ리오.〉若國土者ᄂᆞᆫ果然可愛乎아,果然不可愛乎아.	④然らば則ち、今の所謂愛國心、若くば愛國主義とは何物ぞ、〈所謂パトリチズムとは何物ぞ〉。吾人は何故に我國家、若くば國土を愛する耶、愛せざる可らざる耶。〔愛國心とは何物ぞ〕
夫孺子ㅣ墮井ᄒᆞ면,匍匐往救할ᄉᆡ其遠近을不問ᄒᆞ고其親疏를亦不問이라ᄒᆞ니,是子輿氏의言이不欺我者也ㅣ라.若眞愛國心者ᄂᆞᆫ此孺子를井底에救ᄒᆞᆷ과如ᄒᆞ야,惻隱의念과慈善의心이油然幷茂ᄒᆞ리니,美哉라愛國心이여.純然히不雜乎一私也로다.	**其二**　①蓋し孩兒の井に墜ちんとするを見ば、何人も走つて之を救ふに躊躇せざるべきは、子輿氏我が欺かず。若し愛國の心をして眞に此の孩兒を救ふ底のシムパシー、惻隱の念、慈善の心と一般ならしめば、美なる哉愛國心や、醇乎として一點の私なき也。〔愛國心と惻隱同情〕
惟其然也ㄴᆡ,果然眞正高潔ᄒᆞᆫ惻隱의心과慈善의心이有ᄒᆞ야,決코一己遠近親疏로써異케ᄒᆞᆷ이無ᄒᆞ기를,반다시人이孺子를救할時에,決코己子와人子로써異케ᄒᆞᆷ이無ᄒᆞᆷ과如ᄒᆞ리니,故로世界萬邦에仁人義士ᄂᆞᆫ반다시支蘭士瓦路를爲ᄒᆞ야復活의勝利를祈할거시오,반다시非律賓을爲ᄒᆞ야獨立의成功을祈ᄒᆞ야,英人을視ᄒᆞ기를敵國과如ᄒᆞ고,美人을視ᄒᆞ기를敵國과如ᄒᆞ게할지니,所謂愛國心이란者ㅣ果能如此乎아否乎아.	②然れども思へ、眞個高潔なる惻隱の心と慈善の念は、決して自家との遠近親疎を問はざること、猶ほ人の孩兒の急を救ふに方つて、其我の子たると他の子たるを問はざるが如し。是故に世界萬邦の仁人義士は、ツランスワールの爲めに其勝利と復活を祈り、比律賓の爲めに其成功と獨立を祈れり、其敵國たる英人にして然る者あり。其敵國たる米人にして然る者あり。所謂愛國心は果して能く如此くなるを得る乎。
今의名爲愛國心者ᄂᆞᆫ此와反ᄒᆞ야純然히軍國主義가되나니,何則고.英人은반다시支蘭士瓦路를爲ᄒᆞ야其勝利를祈치안코,美人은반다시非律賓을爲ᄒᆞ야其獨立을祈치아니ᄒᆞᆷ은,다自己의愛國心을損할가慮ᄒᆞᆷ이니,故로彼等의愛國心이無ᄒᆞ다ᄒᆞᆷ은不可ᄒᆞ나,然ᄒᆞ나彼等의高潔ᄒᆞᆫ惻隱慈善의心을究할진ᄃᆡ,〈果然其同情을表示ᄒᆞ기難ᄒᆞ도다〉.然則其所謂愛國心者ᄂᆞᆫ奈何로孺子를救ᄒᆞᆷ과如ᄒᆞᆫ熱念이無ᄒᆞ야마참ᄂᆡ一致치못ᄒᆞᄂᆞᆫ뇨.	③今の愛國者や國家主義者は、必ずやツランスワールの爲めに祈るの英人を以て、愛國の心なしと罵らん、比律賓の爲めに祈るの米人を以て、愛國の心なしと罵らん。然り彼等或は愛國の心なかる可し、然れども高潔なる同情、惻隱、慈善の心が確に之れ有り。然らば即ち愛國心は、彼孩兒を救ふ底の人心と一致せざるに似たり。
然則前述ᄒᆞᆫ所謂愛國心者ᄂᆞᆫ醇乎與惻隱慈善之心으로相	④然り我は所謂愛國心が、醇乎たる同情惻隱の心に非ざるを

背者ㅣ니,彼의愛國心에所愛者ᄂᆞ自家의國土에限ᄒᆞ고自家의國人에限할而已니,他國을愛홈이自國으愛홈만不如ᄒᆞ고,他人을愛홈이自身을愛홈만不若ᄒᆞ야,다만浮華의名譽와壟斷의利益만愛홈이니,果然公乎아私乎아.(未完②)	悲しむ。何となれば愛國心の愛する所は、自家の國士に限れば也。自家の國人に限れば也。他國を愛せずして唯た自國を愛する者は、他人を愛せずして唯た自家の一身を愛する者也。浮華なる名譽を愛する也、利益の壟斷を愛する也。公と云ふ可けんや。私ならずと云ふ可けんや。
論愛國心(續) 愛國心이愛故鄕心과相似ᄒᆞᆫ者ㅣ有ᄒᆞ니,故鄕을愛ᄒᆞᄂᆞᆫ心도雖可貴나,然이나究其原因컨ᄃᆡ,實노卑鄙ᄒᆞ야不足道者ㅣ有ᄒᆞ니,	⑤愛國心は又故鄕を愛するの心に似たり。故鄕を愛するの心は貴ぶ可し。然れども亦甚た卑しむ可き者有り。〔望鄕心〕
幼穉之時에竹馬를騎〈ᄒᆞ고泥龍을舞〉홀ᄉᆡ,果然能히鄕山의某山某水를可愛할줄知乎아否乎아.既而오殊方異國에遠適ᄒᆞ야隻影無儔할時를當ᄒᆞ야비로소懷土望鄕ᄒᆞᄂᆞᆫ念이漸次而生ᄒᆞᄂᆞ니,此即外感으로써激刺된所以라.故로東西蓬飄ᄒᆞ〈고南船北馬ᄒᆞ〉야熱心壯志가幾許分蹉跎ᄒᆞ나니,〈世態炎凉과〉人情冷煖을無不躬焉歷之ᄒᆞ다가,回憶少年의鬪雞走馬ᄂᆞᆫ오작昔日의愉快ᄒᆞ든바이로되,往々히其腦想中에復發故로故邱를慕仰홈이愈切ᄒᆞ고,或行旅의艱苦로風惡土異ᄒᆞ야停杯投箸에下嚥키不能ᄒᆞ고,萬人海裡에半面交도無ᄒᆞ야父母妻子의愛念을不能禁ᄒᆞ야其發達이無極ᄒᆞ리니, 故로故鄕을愛ᄒᆞᄂᆞᆫ心이實로其他鄕을嫌惡ᄒᆞᄂᆞᆫ데로由ᄒᆞ야起홈이아니나,盖其故鄕을對ᄒᆞ야同情이眞有ᄒᆞᆫ惻隱과慈善의心이感홈이오,他鄕을對ᄒᆞ야愀懷가有ᄒᆞᆫ디不過ᄒᆞ니,故로오작意를失ᄒᆞ고境을逆ᄒᆞᆫ人이此情이最甚ᄒᆞ나니,他鄕을忌惡ᄒᆞᄂᆞᆫ心이愈甚할ᄉᆞ록故鄕을愛戀ᄒᆞᄂᆞᆫ念이ᄯᅩᆫ獨切ᄒᆞ니라.	⑥誰が垂髫の時、竹馬に鞭つの時、眞に故鄕の某山某水の愛すべきを解する乎。彼等が懷土望鄕の念を生するは、實に異鄕他國なる者有るを解するの以後に非すや。夫れ東西瓢蓬壯心幾たびか蹉跎して轉た人情の冷酷を覺るの時、人は少年青春の愉快を想起して舊知の故園を慕ふこと切也。彼の風土甚た身に適せず、食味甚だ口に適せず、知己の志を談するなく、父母妻子の憂を慰するなくして、人は故園を思ふこと切也。彼等は故鄕の愛すべく尊ふべきが爲めに思念するよりは、寧ろ唯た其他鄕の忌むべく嫌ふべきが爲めなる也。故鄕に對する醇乎たる同情惻隱に非ずして、他鄕に對する憎惡也。失意逆境の人多く皆な然り、彼等他鄕を憎惡せずんば、未た曾て特に故鄕を思慕せざる也。〔他鄕に對する憎惡〕
雖然이나故鄕을愛戀ᄒᆞᄂᆞᆫ念이ᄯᅩᆫ失意逆境ᄒᆞᆫ人ᄲᅮᆫ아니라,得意順境ᄒᆞᆫ人도亦有之ᄒᆞ나,然ᄒᆞ나其所以然ᄒᆞᆫ바〈를細譽[⇒擧)]ᄒᆞ건ᄃᆡ〉,得意人의所謂故鄕을思慕ᄒᆞᆫ다ᄂᆞᆫ其心事ᄂᆞᆫ一層更卑ᄒᆞ야尤不足道者ㅣ有ᄒᆞ니,〈何者오〉.彼等은其所謂得意ᄒᆞᆫ事를鄕黨의父老의惻隱과慈愛에서出乎아否乎아.不過其一身의私意를爲할而已也니,然則다만虛榮과虛誇와競爭心에서做出ᄒᆞᆫ私意의專注ᄒᆞᆫ바이니,古人이有言호ᄃᆡ,富貴ᄒᆞ고故鄕에不歸ᄒᆞ면,곳衣錦夜行과如ᄒᆞ다.ᄒᆞᆫ是語也ㅣ其秘密의隱裏을揭ᄒᆞ고其汚穢의鄙念을破ᄒᆞᆫ語意가洞然히燭照ᄒᆞ도다.	⑦彼等は曰く、望鄕の念は獨り失意逆境の人のみならず、得意順境の人も亦た之れ有るに非ずやと。然り洵とに之れ有り。得意の人の故鄕を思慕するは、其心事更に卑しむべき有り。彼等は即ち鄕里の父老知人に向つて其得意を示さんと欲するのみ。鄕里に對する同情惻隱に非ずして、一身の虛榮也、虛誇也、競爭心也。古人曰く、『富貴にして故鄕に還らずんば錦を衣て夜行くが如し』と、是此一語、彼等が卑しむべき胸底の秘密を道破して燭照するが如きを見ずや。
〈今의故鄕을愛戀ᄒᆞᄂᆞᆫ者ㅣ〉曰호ᄃᆡ,學校를반다시吾의鄕里에立ᄒᆞ고鐵途를반다시吾의府郡에設ᄒᆞᆫ다ᄒᆞ며,或甚ᄒᆞᆫ者ᄂᆞᆫ且曰總務委員이반다시吾鄕에서出ᄒᆞ고總務大臣이반다시吾州에서出ᄒᆞᆫ다ᄒᆞ니,彼等의希望ᄒᆞᄂᆞᆫ一身의利益이虛榮外에不出ᄒᆞ니,其鄕里를對홈이果然同情의惻隱과慈愛의心이有乎아.故로有職之士ᄂᆞᆫ洞幽徹微ᄒᆞ야能히仰天而太息할ᄲᅮᆫ不是로다.	⑧曰く大學を我地方に置かん、曰く鐵道を我地方に敷かん、是れ猶ほ可也。甚しきは即ち曰く、總務委員を我縣より出さん、大臣を我州より出さん。彼等は一身の利益若くば虛榮を外にして、眞に其の鄕里に對する同情慈愍の念に因て然る有る乎。有識の人や高潔の士や、之に對して果して一毫侮蔑の念なきことを得る乎。
惟其然也故로,彼의愛國心이其原因과動機가다故鄕를愛戀ᄒᆞᄂᆞᆫ心으로더부러一轍이될지니,彼虞芮의爭이진실로愛國者의好標本이될가,彼蠻觸의戰이果然愛國者의好譬喩이될가.嗚呼噫嘻라,실ᄉᆞ天下의可憐ᄒᆞᆫ一物인져.	⑨然り愛國心が望鄕の念と其因由動機を一にすとせば、彼の虞芮の爭ひは愛國者の好標本なる哉、彼の觸蠻の戰ひは愛國者の好譬諭なる哉。天下の可憐蟲なる哉。〔天下の可憐蟲〕
	【⑩於是乎思ふ、岩谷某が國益の親玉と揚言するを笑ふこと

	勿れ、彼が東宮大婚の記念美術館に千圓の寄附を約して其約を履まさるを笑ふこと勿れ。天下の所謂愛國者、及ひ愛國心、岩谷某に於て只五十歩百歩の差のみ。愛國心の廣告は唯た一身の利益の爲めのみ、虚誇の爲めのみ、虚榮の爲めのみ。〔虚誇虚榮〕】
古者羅馬詩人의誇揚賛美ᄒᆞᆫ바ᄂᆞᆫ皆是黨派의智識을利用ᄒᆞᆷ이요,ᄎᆞᆷ이른바國家를知ᄒᆞᆷ은아니々,彼의所謂國家란者ᄂᆞᆫ敵國과敵人을因ᄒᆞ야觸感된思想이니,迷信의因導로由ᄒᆞ야敵國과敵人을憎惡ᄒᆞᆷ에不過ᄒᆞ니라.	**其三**　①【『黨派あることなし、唯た國家あるのみ』 “Then none was for a party, Then all were for the State.”とは、】古羅馬の詩人が誇揚し賛美せる所〈也。而も何ぞ知らん〉、是れ黨派を利用するの智なかりしが爲めのみ、國家あるが故に非ずして敵國敵人ありが爲めのみ。敵國敵人憎むべしてふ迷信ありしが爲めのみ。〔羅馬の愛國心〕
吾輩가所見이無ᄒᆞ고云ᄒᆞᆫᄇᆞ아니라,當時羅馬의多數ᄒᆞᆫ貧困農夫가少數의富人을爲ᄒᆞ야所謂國家의戰事에奔走ᄒᆞ며,亦其臨戰할時에도勇猛奮進ᄒᆞ야矢石을冒ᄒᆞ고兵革을躬ᄒᆞ야一身을不顧ᄒᆞ니,其忠義와節烈이果然天地를感動ᄒᆞ고鬼神을泣ᄒᆞ도다.然이나僥倖이戰捷ᄒᆞ야全身의歸國ᄒᆞᆷ을得ᄒᆞ야도,其從軍을因ᄒᆞ야所負ᄒᆞᆫ債務를積滯未償ᄒᆞ야,ᄃᆡ々여自身이奴隷의城에陷ᄒᆞ고,ᄯᆞ戰役之間에도富者의田畝ᄂᆞᆫ홍ᄉᆞᆼ巨[⇒臣]屬과奴隷에屬ᄒᆞ야其耕耘과灌漑를不失ᄒᆞ거니와,貧者의田은荒癈靡蕪에全委ᄒᆞ야債務가由是而生焉故로往々自賣奴隷ᄒᆞ나니, 嗚呼라.	②我は見る、當時羅馬の貧困なる多數の農夫が、少數の富人と共に、或は富人に從つて、所謂國家の爲めに戰に赴けることを。〈而して我は見る〉、彼等が敵人と戰ふや、勇猛奮進矢石を冒して身を顧みず、其忠義眞に感ずるに堪へたることを。而して更に我は見る、彼等が幸ひに戰捷ち身を全くして歸るの時は、即ち彼等が從軍の間に負へる債務の爲めに、直ちに奴隷の域に陷らしめらるゝの時なることを。見よ彼の戰役の間、富者の田畝は常に其臣屬奴僕の耕耘灌漑する所となるも、貧者の田は全く荒廢靡蕪に委するの已むなかりしに非ずや、而して債務は生ず、而して買れて奴隷となる。果して誰の咎ぞや。〔羅馬の貧民〕
彼羅馬人의所謂敵國敵人을憎惡ᄒᆞᆫ다〈ᄂᆞᆫ者가果然愚昧ᄒᆞᆫ所見이로다〉.彼敵國敵人이비록彼等에禍害가될지라도,其同胞中富者에게被禍ᄒᆞᆷ보담出치못ᄒᆞ리니,彼等이敵國敵人을憎惡ᄒᆞ기爲ᄒᆞ야,其自由를見奪ᄒᆞ고其財産을被損ᄒᆞ야浸々然奴隷의域에陷케ᄒᆞ나니,果然누가彼等으로ᄒᆞ야금此境에至ᄒᆞ도록ᄒᆞ얏ᄂᆞᆫ가.實노其同胞의所謂愛國心을主唱ᄒᆞᆫ者ㅣ使之然也오,彼等思想의所及ᄒᆞᆫᄇᆡ아니로다.	③彼等は羅馬の所謂敵國敵人を憎惡せり。然れども敵人が彼等に向つて爲す所の禍害ありとせば、是れ決して其同胞たる富者が彼等に向つて爲す以上には出でざるべし。彼等は敵人の爲めに其自由を奪はるべし、其財産を奪はるべし、奴隷と爲さるべし。而も彼等は現に其同胞の爲めに爾く爲されつゝありしに非ずや。彼等想ふて此に及ばざる也。
富者ᄂᆞᆫ戰爭을因ᄒᆞ야益富ᄒᆞ나니,臣屬과奴隷가日益增加ᄒᆞᆷ을因ᄒᆞᆫ故也오,貧者도亦因之而益貧ᄒᆞ나니,若詰其何故인ᄃᆡ,必曰國家의戰事을爲ᄒᆞᆷ이라ᄒᆞᆯ지니,彼等이國家의戰事를爲ᄒᆞ야奴隷의境에浸淪ᄒᆞ도록,오희려討伐敵人ᄒᆞᆫ過去의虚榮을追想ᄒᆞ야,써其勲業을誇揚ᄒᆞ며,써其功名을銘紀[⇒記]ᄒᆞ나니,是何等의癡愚ᄒᆞᆫ思想인고.嗚呼라古羅馬의愛國心이其實如此而已로다.	④富者の戰ふや、富益す多きを加へ、奴隷臣從益す多きを加ふる也。而して貧者は何の加ふる所あらず、唯だ曰く、國家の爲めに戰へりと。彼等は國家の爲めに戰ふて奴隷の境に沈淪するも、而も猶ほ敵人を討伐せりてふ過去の虚榮を追想して、甘心し満足し誇揚せる者、嗚呼是れ何等の痴呆ぞや。古羅馬の愛國心は實に如此くなりき。〔何等の痴呆ぞ〕
古希臘의所謂耶羅德의奴隷者ᄂᆞᆫ既事於兵ᄒᆞ고,又事於奴隷호ᄃᆡ,오희려彼等身體의强健이過度할가慮ᄒᆞ고,彼等人口의增殖이過度할가慮ᄒᆞ야,其主權된者ㅣ任意로摧折焉殺戮焉이로되,彼等이其主權者를爲ᄒᆞ야出戰ᄒᆞ기를不厭ᄒᆞ나니,其勇敢과忠義가實無比於此나,然이나맛참ᄂᆡ한번倒戈ᄒᆞ고,其天賦ᄒᆞᆫ自主의權을恢復할쥴不知ᄒᆞ니,悲夫悲夫여다.	⑤古希臘に於ける所謂ヘロットなる奴隷を見よ。事あれば兵たり、事なければ奴隷たり、而して或は彼等の强健度に過ぎ、彼等の人口増殖の度に過ぐるや、常に其主の爲めに殺戮せられたりき。而も彼等が其主の爲めに戰ふや、忠義實に比なかりき、勇敢實に比なかりき、曾て一たび戈を倒まにして其自由を得んと欲するなかりき。〔希臘の奴隷〕
彼等의所以然ᄒᆞᆫ者ᄂᆞᆫ何故오. 其外國과外人을視ᄒᆞᆷ을곳所謂敵國과敵人과如ᄒᆞ게ᄒᆞ야以爲憎惡ᄒᆞ며,以爲討伐ᄒᆞ야當行할義務로誤信ᄒᆞ고,無上ᄒᆞᆫ名譽로誤信ᄒᆞ며,無上ᄒᆞᆫ光榮으로誤解ᄒᆞ야,맛ᄎᆞᆷᄂᆡ虚誇인쥴不知ᄒᆞ고虚榮인쥴不	⑥彼等の然る所以は何ぞや。唯だ其外國外人たる者、即ち彼等の所謂敵國敵人を憎惡し討伐するを以て、無上の名譽と信ずれば也、無上の光榮と信ずれば也。其虚誇たるを知らざれば也、其虚榮たるを悟らざれば也。嗚呼此迷信、彼等が所謂

悟ᄒᆞ나니,嗚呼라此等의迷信은진실로彼等所謂愛國心의虛誇的虛榮的에迷信이니,實로腐敗ᄒᆞᆫ神水를飮ᄒᆞᄂᆞᆫ天理의敎徒에不過ᄒᆞ도다.	愛國心てふ虛誇的虛榮的迷信の固きは、實に腐敗せる神水を飮むの天理敎徒に過ぐる者ある也。〈而して其害毒も亦た之に過ぐる有り〉。〔迷信的愛國心〕
然이나彼等의敵人을憎惡ᄒᆞᆷ도猶不足怪也니,蓋人生이未開化ᄒᆞᆫ時代를當ᄒᆞ야,其智識이禽獸에게去ᄒᆞ기不遠ᄒᆞ니,所謂同仁과篤愛가無ᄒᆞᆫ故이라.原始以來로愛憎의兩念이糾繩의相纏과環鎖의相連과如ᄒᆞ니,禽獸의原野에在ᄒᆞᆷ을不見乎아.瓜搏과牙噬이同類相殘ᄒᆞ다가,一旦에未相見者를遇ᄒᆞᆷ이忽然이畏懼ᄒᆞ여震恐ᄒᆞ나니,畏懼와震恐를由ᄒᆞ야即是猜忌와憎惡가生ᄒᆞ고,猜忌와憎惡를由ᄒᆞ야於是乎咆哮焉ᄒᆞ며爭鬪焉ᄒᆞ야,비로소其相殘ᄒᆞᆫ同類를締結ᄒᆞ야其公共의敵과抗爭ᄒᆞ나니,彼等이其公共의敵과抗爭할時에ᄂᆞ,其同類가互相親睦ᄒᆞᄂᆞᆫ形狀이怡然可掬ᄒᆞ고油然相親ᄒᆞ나,彼等의禽獸와如ᄒᆞᆫ愛國心이是耶아非耶아.古代人類의野蠻的生活이非若是哉아.	⑦怪しむ勿れ彼等が敵人を憎惡するの甚しきを。蓋し缺陷なる人生、野獸に近き人生は、甚だ同仁なること能はず、博愛なること能はず。原始以來、愛憎の兩念は常に糾繩の如く相纏ひ、鎖環の如く相連れる也。彼の野獸を見よ、彼等は猜々として同類相喰めり、而も一朝未だ相知らざる者に逢へば忽ち畏懼恐慌し、畏懼恐慌は即ち猜忌憎惡となり、猜忌憎惡は即ち咆哮となり、攻擊となり、前に相喰めるの同類は却て相結びて其公共の敵に抗爭す。彼等の公共の敵に當るや、同類相互の親睦の狀、掬すべき有り。彼等野獸は實に愛國心ある耶非耶。古代人類が蠻野の生活豈に之と遠からん哉。〔愛憎の兩念〕
野蠻人類의生活은同類相結ᄒᆞ야其自然의戰으로써其異種族의戰을釀出ᄒᆞᄂᆞᆫ거슬,自以謂愛國心이라ᄒᆞ나니,其灼然可見할者ᄂᆞ,彼等所謂團体者의忽統親睦之同情者ᄂᆞ其所遇의敵을由ᄒᆞ야生ᄒᆞᆫ빅니,오직敵人을對ᄒᆞᄂᆞᆫ憎惡心의反動力이라.故로其同病을因ᄒᆞ야,비로소相憐의心이有ᄒᆞᆷ과如ᄒᆞ도다.	⑧蠻人は實に同類相結んで、自然と戰へり、異種族と戰へり、彼等は所謂愛國心ある也。然れども知らざる可らず、彼等の團結や親睦や同情や、唯だ其敵を同じくせるに由れることを、唯だ其敵人に對する憎惡の反動なることを。病を同じくして始めて相憐の心ある者なることを。
오직如此할진ᄃᆡ,即所謂愛國心이란者ᄂᆞ外國外人을討伐ᄒᆞᄂᆞᆫ榮譽의好戰心에不過ᄒᆞ니,其好戰心者ᄂᆞ即動物的天性也요,此[動＋]物的天性이即是好戰的愛國心이라.故로釋迦와基督의排斥ᄒᆞᄂᆞᆫ바오,文明理想의目的에能容지못할者이로다.	⑨如此くんば、所謂愛國心は、即ち外國外人の討伐を以て榮譽をする好戰の心也、好戰の心は即ち動物的天性(アニマルインスチンクト)也。而して此動物的天性や、好戰的愛國心也、是れ實に釋迦基督の排する所、文明の理想目的の相容れざる所に非ずや。〔好戰の心は動物的天性〕
哀哉라. 世界人民이如此ᄒᆞᆫ動物的天性의競爭場裡에十九世紀를送過ᄒᆞ얏시니,更히依然이無涯無埃ᄒᆞᆫ二十世紀의新天地를占有할지여다.	⑩而も哀い哉、世界人民は尚ほ此動物的天性の競爭場裡に十九世紀を送過し、更に依然たる境涯を以て二十世紀の新天地に處せんとはする也。
社會公理에適足ᄒᆞᆫ者ᄂᆞ生存의法則而已거ᄂᆞᆯ,進化가日漸發達ᄒᆞ야其統一의境域과交通의範圍가亦隨而擴大ᄒᆞ나니,於是에所謂公共의敵이라ᄂᆞ異種族과異部落이亦漸減少ᄒᆞᆷ을因ᄒᆞ야彼等憎惡의目的을亦失ᄒᆞ고,其憎惡의目的을既失ᄒᆞᆷ을因ᄒᆞ야其所以結合親睦의目的을亦失ᄒᆞ리니,是以로彼等의一國家一社會一部落을愛ᄒᆞᆫ心이變ᄒᆞ야一身一家一黨을愛ᄒᆞᆷ이不過ᄒᆞ고,其種族間部落間에野蠻의好戰的天性이ᄯᅩᆫ變ᄒᆞ야個人間爭鬪와朋黨間軋轢과階級間戰鬪가되나니,嗚呼라純潔ᄒᆞᆫ理想과高尚ᄒᆞᆫ道德이盛行할時를當ᄒᆞ야,動物的天性을오히려除卻지못ᄒᆞ면,是時世界人民이既無所敵故로其憎愛[⇒惡]心을施할곳과戰爭을施할곳이無ᄒᆞ야,但競爭於無形之地而名之曰愛國心이라ᄒᆞ고,自稱爲美譽之行이라ᄒᆞ리니,(不其惑歟아). (未完③)	⑪社會が適者生存の法則に從つて、漸く進化し發達し、其統一の境域と其交通の範圍も亦た隨つて擴大するに至るや、其公共の敵とせる異種族、異部落なる者、漸く減じて、彼等が憎惡の目的亦た失はる。憎惡の目的既に失ふや、其親睦結合せる所以の目的亦た失はる。於是乎、彼等が一國、一社會、一部落を愛するの心は、變じて唯た一身、一家、一黨を愛するの心となる。曾て種族間、部落間に於ける蠻野なる好戰的天性は、即ち變じて個人間の爭鬪となれり、朋黨間の軋轢となれり、階級間の戰鬪となれり。嗚呼純潔なる理想と高尚なる道德の盛行せざるの間は、動物的天性の尚ほ除却し能はざるの間は、世界人民は遂に敵を有せざる能はず、憎惡せざる能はず、戰爭せざる能はず。而して之を名けて愛國心と云ひ、之を稱して名譽の行となせる也。〔適者生存の法則〕
	【⑫〔自由競爭〕嗚呼歐米十九世紀の文明よ、一面には激烈なる自由競爭の、人心をして益す冷酷無情ならしむる有り、一面には高尚正義なる理想と信仰滔として地を掃ふ。我文明の前途洵とに寒心す可らずや。而して姑息なる政治家や、功名を好むの冒險家や、奇利を趁ふの資本家は、之を見て即ち

	絶叫して曰く、四境の外を見よ大敵は迫れり、國民は其個人間の爭闘を止めて、國家の爲めに結合せざる可らずと、彼等は實に個人間に於ける憎惡の心を外敵に轉向せしめて、以て各々爲めにする所あらんとする也。而して之に應ぜざるあれば即ち責めて曰く、非愛國者也、國賊也と。〔動物的天性の挑撥〕知らずや所謂帝國主義の流行は實に這箇の手段に濫觴せることを、所謂國民の愛國心、換言すれば動物的天性の挑撥に出でたることを。】
論愛國心（續） 自己를愛홈은可ᄒᆞ거니와他人을惡홈은不可ᄒᆞ고,同鄕人을愛홈은可ᄒᆞ거니와異鄕人을惡홈은不可ᄒᆞ며,自國을愛홈은可ᄒᆞ거니와外國을惡홈은不可ᄒᆞ니,만일其所愛홈을爲ᄒᆞ야其所惡홈을討ᄒᆞᄂᆞ者ᄂᆞ읏지可히愛國心이라謂ᄒᆞ리오.	**其四**　①自家愛す可し、他人憎む可し、同鄕人愛す可し、他鄕人憎む可し、神國や中華や愛す可し、洋人や夷狄や憎む可し、愛す可き者の爲めに憎む可き者を討つ、是を名つけて愛國心と云ふ。〔洋人夷狄の憎惡〕
然則愛國主義란者ᄂᆞ最可憐ᄒᆞᆫ者이니,읏지彼等迷信의咎가아니리오.若非迷信이면實是好戰의心也오,亦非好戰之心이면實爲虛誇虛榮의廣告的賣品이니,如此主義ᄂᆞ實로專制政治家가自家의名譽을達코져ᄒᆞᄂᆞ野心으로其手段을供ᄒᆞᄂᆞ利器로認ᄒᆞ노라.	②然らば即ち愛國主義は、憐れむ可きの迷信に非ずや、迷信に非ざれば好戰の心也、好戰の心に非ざれば虛誇虛榮の廣告也、賣品也。而して此主義や常に專制政治家が自家の名譽と野心を達するの利器と手段に供せらる。〔野心を達するの利器〕
希臘羅馬의舊跡은勿論ᄒᆞ고,近代東西洋愛國主義의流行ᄒᆞᄂᆞ利用을較之上古中古而更甚ᄒᆞ도다.	③之を以て獨り希臘羅馬の舊夢となること勿れ。愛國主義の近代に流行し利用せらるゝことは、上古中古よりも更に甚しき也。
	【④想起す、故森田思軒氏が一文を艸して、黄海の所謂靈鷹は靈に非ずと説くや、天下皆な彼を責るに國賊を以てしたりき、久米邦武氏が神道は祭天の古俗也と論ずるや、其教授の職を免ぜられたりき、西園寺侯が所謂世界主義的教育を行はんとするや、其文相の地位を殆うくしたりき、内村鑑三氏が勅語の禮拜を拒むや、其教授の職を免ぜられたりき、尾崎行雄氏が共和の二字を口にするや、其大臣の職を免ぜられたりき。彼等皆な大不敬を以て罵られき、非愛國者を以て罰せられき。是れ明治聖代に於ける日本國民の愛國心の發現也。〔明治聖代の愛國心〕】
國民의愛國心者ᄂᆞ一旦에忤其所好ᄒᆞ면可以箝人口ᄒᆞ고,可以掣人肘ᄒᆞ며,可以束縛人之思想ᄒᆞ고,可以干涉人之信仰ᄒᆞ며,歷史의論評을亦可得禁이오,聖書의講究를足能得妨이며,科學的基礎를可得破碎며,譯[⇒亦]文明之道德을則恥辱之ᄒᆞ나니,若是等의愛國心이可以邀榮譽博功名也歟아.	⑤國民の愛國心は、一旦其好む所に忤ふや、人の口を箝する也、人の肘を掣する也、人の思想をすらも束縛する也、人の信仰にすらも干涉する也、歷史の論評をも禁じ得る也、聖書の講究をも妨げ得る也、總ての科學をも碎破することを得る也。文明の道義は之を恥辱とす。而も愛國心は之を以て榮譽とし功名とする也。
如英國近代에自由國이라極稱ᄒᆞ고,博愛國이라極稱ᄒᆞ고,平和國이라極稱ᄒᆞ야도,其愛國心의激烈할時를當ᄒᆞ야ᄂᆞ,自由를主唱ᄒᆞᄂᆞ者와革命을請願ᄒᆞᄂᆞ者와普通撰[⇒選]擧를主張ᄒᆞᄂᆞ者가非皆問以叛逆之罪者며,非皆責以國賊之名者乎아.	⑥【獨り日本の愛國心のみならんや。】英國は近代に於て極めて自由の國と稱す、博愛の國と稱す、平和の國と稱す。(如此の英國すらも)、曾て其愛國心の激越せるの時に於てや、自由を唱ふる者、改革を請願する者、普通選擧を主張する者、皆な叛逆を以て問はれしに非ずや、國賊を以て責められしに非ずや。〔英國の愛國心〕
英國人의愛國心이大發揚ᄒᆞᆫ寖近事例가莫如與法國爭戰之時ᄒᆞ니,此戰爭이一千七百[九+]十三年大革命의時運을當ᄒᆞ얏ᄂᆞᆫ딕,自後로雖經多少의斷續이나,一千八百十五年拿破侖의覆沒할時期를延至ᄒᆞ야,비로스[⇒소]大段	⑦英國人が愛國心の大に發揚せる最近の事例は、彼等が佛國との戰爭當時に如くは莫し。此戰爭や一千七百九十三年大革命の際に初めて、爾後多少の斷續ありしと雖も、延て一千八百十五年奈勃翁の覆沒に至つて大段落を成す。彼等は其時の

落을成ᄒᆞ얏시니,彼等昔日思想과今日思想이其相距가幾何며,彼等所謂愛國心者ㅣ今日所謂愛國主義로더부러其流行의事情과方法이을마나相異ᄒᆞ고.	近きと共に其思想も亦た今日の思想と相距る遠からず、彼等の所謂愛國心も今日の愛國主義と、其流行の事情と方法に於て、甚だ異なる所なき也。〔英佛戰爭〕
法國의戰爭도 〈當時英國의人民은〉 惟此一事而已오,惟此一言而已矣니,其原因如何와結果如何와利害如何와是非如何ᄂᆞ勿論ᄒᆞ고,但以愛國心으로論할질ᄃᆡ,만일革命의精神과抗爭의熱念과批評의宏議가一旦에休止ᄒᆞ면,無何有之鄕으로必歸ᄒᆞ라니,國內의黨爭이亦遂消滅ᄒᆞ야,如哥魯利志者ᄂᆞ戰爭의初年을當ᄒᆞ야亦頗非義라가,既而요國民을結合一致ᄒᆞ야遂轉其方針ᄒᆞ고,又若呼阿志者ᄂᆞ以平和로自由의大義를自持라가已久不渝홈이,既知議會의大勢를不可挽回ᄒᆞ고,亦不能守其宗旨ᄒᆞ니,雖或有之라도議場中黨派的討論은不能抵制ᄒᆞ나니,嗚呼라當時英國을皆謂擧國一致라ᄒᆞ야所謂政治家策士가口頭에恒稱不已ᄒᆞ나니,所謂擧國一致云者ᄂᆞ即羅馬詩人의所謂惟知有國家者와如할而已로라.	⑧佛國との戰爭。唯だ此一事、此一語あるのみ。其原因の如何を問ふこと勿れ、其結果の如何を議すること勿れ、是が利害を言ふこと勿れ、是が是非を言ふこと勿れ、言へば必ず非愛國者を以て責められん。改革の精神や、抗爭の心や、批評の念や一時全く休止して、否な休止せしめられて、而して國內の黨爭は殆ど消滅に歸せり。彼コルリッヂ其人の如きすら、戰爭の初年之を非議せしに拘らず、遂に戰爭が國民を一致結合せしめたるを神に謝するに至れり。而して彼フォックスの一輩が、其平和と自由の大義を支持すること渝らず、議會の大勢回す可らざるを知て場に列するなかりしが如きは、即ち之れ有りと雖も、而も議場は一の黨派的黨論を見ざるに至れり。嗚呼當時の英國や實に擧國一致、我日本の政治家策士が喜んで口にする所の『擧國一致』、羅馬詩人の所謂『唯た國家ある耳』盛なる哉。〔所謂擧國一致〕
雖然이나吾輩思之컨ᄃᆡ,是時에英國의一般國民을擧ᄒᆞ야問ᄒᆞ되,其胸中에果然何者ㅣ爲理想이며,何者ㅣ爲道德이며,何者ㅣ爲同情이며,何者ㅣ爲國家乎아 〈ᄒᆞ면,皆必曰愛國心이라謂ᄒᆞ얏시리라〉.	⑨然れども思へ、此時英國民を擧けて、其胸中何の理想ある乎、何の道義ある乎、何の同情ある乎、何の『國家』ある乎。
當時英國의人民이擧國이若狂ᄒᆞ其宗旨의所在를叩코져하면,惟對法國을憎惡ᄒᆞ며,惟對革命을憎惡ᄒᆞ며,惟對拿破侖을憎惡홈이不過ᄒᆞ니,果然一豪라도革命的精神이有ᄒᆞ야,法人의理想으로더부러關聯ᄒᆞ思想이有乎아否乎아.必然嫌忌할ᄲᆞᆫ[⇒ᄲᆞᆫ]不是라,且必競相侮辱ᄒᆞ며,侮辱할ᄲᆞᆫ不是라,且必群起ᄒᆞ야全力을注ᄒᆞ야攻擊ᄒᆞ긔도非難이[⇒도]ᄒᆞ리로라.	⑩彼れ英國民を擧げて、狂せる英國民を擧げて、有る所の者は、唯た佛國に對する憎惡のみ、唯た革命に對する憎惡のみ、唯た奈勃翁に對する憎惡のみ。苟くも一毫革命的精神、若くは佛人の理想に關聯するの思想あらん歟、彼等は啻に之を嫌忌するのみならずして、競ふて之を侮辱せるに非ずや、啻に之を侮辱すのるみならず、群起して之を攻擊し、之が處罰に全力を注けるに非ずや。
於是에비로스[⇒소]外國을對ᄒᆞᄂᆞ愛國主義의最高潮가即是內治罪惡을對ᄒᆞᄂᆞ最高潮인쥰知ᄒᆞ노라.所謂愛國의狂熱者ㅣ但於戰爭時代에만其愛國心이大發越ᄒᆞ고,至於戰後ᄒᆞ야ᄂᆞ其狀況을非所計及者로다.	⑪於是乎知る、外國に對する愛國主義の最高潮は、內治に於ける罪惡の最高潮を意味することを、而して彼等愛國狂は即ち戰爭の間大に發越せる愛國心が、戰後に於て何の狀を現するやを見んと要す。〔罪惡の最高潮〕
戰後英國을試觀컨ᄃᆡ,法國에對ᄒᆞ憎惡의狂熱이已覺稍冷ᄒᆞ야軍費의支出者ㅣ隨而停止ᄒᆞ고,大陸諸國의戰役中에在ᄒᆞ者가其工業界의狀況이亦隨兵役ᄒᆞ야其需用이絶焉ᄒᆞ고,英國의農工業이亦隨之而一大衰頹의景狀을逞出ᄒᆞ며,下等人民의困乏饑餓者ㅣ國中에遍滿ᄒᆞ야시니,當時富豪資本家가果然一毫라로愛國心이猶存이며果然一絲라도慈悲同情의念이猶存이며,亦或擧國이一致的結合親睦의心이果存乎아.依然히其同胞의窮乏困餓ᄒᆞ야溝壑에展轉ᄒᆞ者를坐視若漠然淡然ᄒᆞ니,昔日에讎敵을憎惡ᄒᆞ든前轍과如一치아니ᄒᆞ가.然則下等의貧民을憎惡홈이法國革命과拿破侖을憎惡ᄒᆞ든思想으로더부러果然孰重孰輕乎아.	⑫戰後に於ける英國や、佛國に對する憎惡の狂熱稍や冷却し來ると共に、軍費の支出は停止せり、大陸諸國が戰役中、其工業界の攪亂せるが爲めに特に英國に仰けるの需用は停止せり、英國の工業及ひ農業は、忽焉として一大不景気に襲はれたり、次で來る者は下層大多數人民の窮乏なりき飢餓なりき。此時に於て彼れ富豪資本家や、果して一點の愛國心猶ほ存せし乎、彼等は果して一片の慈愍同情の念猶ほ存せし乎、擧國一致的結合親睦の心猶ほ存せし乎。彼等は其同胞の窮乏飢餓して溝壑に轉するを見ること、宛も仇敵の如くなりしに非ずや、彼等が下層の貧民を憎惡するは、夐かに佛國革命及ひ奈勃翁を憎むに勝りしに非ずや。〔戰後英國〕
至若白多路羅（地名）의事者ᄂᆞ尤堪功[⇒切]齒할者ㅣ有ᄒᆞ니,烏阿德路羅（地名）에셔拿破侖의大軍을既覆ᄒᆞ後에,議院을改革할意로請求ᄒᆞ든多數勞働者를白多羅呼伊路德（地名）에集合ᄒᆞ고,悉蹂躪而虐殺ᄒᆞ니,時人이稱ᄒᆞ되,	⑬彼ペートルローの事に至つては、切齒に堪へたり。彼等は奈勃翁の軍をウオートルローに覆へして未だ久しきを經ざるに、議院改革を要求してペートルフイールドに集合せる多數の勞働者を、蹂躪し虐殺せるに非ずや。時人ウオートルロー

烏阿德路羅의戰爭은不滿一笑라ᄒᆞ고,〈오작白多路羅의戰爭을尚今稱傳ᄒᆞ니〉,然則敵軍을烏阿德路羅에擊破ᄒᆞ든愛國者가又一轉念ᄒᆞ야,復縱於白多路羅而其同胞를虐殺ᄒᆞᄂᆞᆫᄃᆡ至ᄒᆞ야시니,所謂愛國心이란者가果然同胞를愛ᄒᆞᄂᆞᆫ心이有乎아否乎아.所謂一致의愛國心을結合ᄒᆞ얏ᄊᆞ든愛國心者ㅣ果然戰塵이方息홈인,或於國家國民의利益을過而問之者ㅣ有乎아否乎아.吾輩ᄂᆞᆫ但見其國民은碎首敵人의鋒鏑만될而已니,然則同胞의血만空灑홈을嘗試홈에不過ᄒᆞ도다.	の戰に比して冷語してペートルローと呼ぶ者是れ也。ウオートルローに敵軍を破れるの愛國者は、今や一轉してペートルローに其同胞を虐殺す。愛國心てふ者は眞に其同胞を愛する心なる耶。所謂一致せる愛國心、結合せる愛國心は、征戰一たび了れば、國家國民に向つて何の利益をか與ふるや。見よ敵人の首を碎ける鋭鋒は、直ちに同胞の血を嘗めんとす。〔ペートルロー〕
哥魯利志戰爭의始를當ᄒᆞ야國民一致의主義를大唱ᄒᆞ야擧國이騷然ᄒᆞ더니,此際에至ᄒᆞ야所謂一致者ㅣ果安在哉아.다만憎惡의心으로써憎惡의心을生할而已니,何則고.敵國人을憎惡ᄒᆞ든心으로써其國人을憎惡ᄒᆞᄂᆞᆫ心이幻出ᄒᆞ야시니,然則動物的天性이果然斯如할ᄊᆞ름인故로,烏阿德路羅의心은即是白多[路－]羅의心이니,虛僞者ㅣ라愛國心의結合이여.〈果然如是할而已로다〉.	⑭コルリッヂは戰爭の爲めに、國民の一致を神に謝せり、然れども此に至つて一致なる者果して何處に在りや。憎惡の心は憎惡を生むのみ、敵國を憎むの心は直ちに國人を憎むの動物的天性のみ、ウオートルローの心は直ちにペートルの心のみ。虛僞なる哉、愛國心の結合や。〔虛僞なる哉〕
一轉眼而更觀德意志 英吉利의事ᄂᆞᆫ姑不必論이여니와,누구든지慧眼을更具ᄒᆞ야德意志의情狀을一察할지니,夫俾斯麥公者ᄂᆞᆫ實ᄂᆞ愛國心의權化오,惟德意志帝國者ᄂᆞᆫ實ᄂᆞ愛國神垂迹의靈場이니,即是愛國宗의靈驗이果然如何ᄒᆞ게赫然灼然ᄒᆞᆫ지,其威靈을觀코져ᄒᆞᄂᆞᆫ者ㅣ有乎아.試一詣此靈場ᄒᆞ야視之여다.	**其五**　①姑らく英國を去て眼を獨逸に一轉せよ。故ビスマーク公は實に愛國心の權化也、獨逸帝國は實に愛國神垂迹の靈場也。愛國宗の靈場が、如何に赫然灼然たるかを知らんと欲せば、一たび此靈場に詣せざる可らず。〔眼を獨逸に一轉せよ〕
日本維新以後로貴族軍人의就學者가以爲ᄒᆞ되,凡世界萬國의愛國主義와帝國主義를無不隨喜渴仰ᄒᆞ되,더욱德意志의愛國心에注意ᄒᆞ나니.蓋德意志의愛國心이란者ᄂᆞᆫ古代希臘과ᄌᆞ못羅馬와近伐[⇒代]英國이皆無其比로도,果然迷信치아닌者ᄂᆞᆫ誰也며,果然虛誘虛榮에不惑ᄒᆞᆫ者ᄂᆞᆫ誰也오.	②我日本の貴族軍人學者を初めとして、凡そ世界萬國の愛國主義者、帝國主義者が隨喜渴仰して措かざる獨逸の愛國心は、古代希臘や羅馬や、及び近代英國の愛國心に比して、果して迷信ならざる乎、虛誇虛榮ならざる乎。
故俾斯麥公者ᄂᆞᆫ實歷代의人豪라.此公이未起之前을當ᄒᆞ야,일쯕이北部日耳曼諸邦의紛々分立홈을灼見ᄒᆞ고,一心에以爲ᄒᆞ되,言語가同一ᄒᆞᆫ國民이반다시結合지아니ᄒᆞ면不可라ᄒᆞ고,直時帝國主義의眼光을先注射之ᄒᆞ야,始試其運動而竟能聯合諸邦ᄒᆞ야以成一致ᄒᆞ얏시니,此公의大業이진실노千載의光輝로다.雖然이나其帝國主義를崇奉ᄒᆞ야,써諸邦을結合統一할目的이반다시諸邦實際의利益을保護ᄒᆞ야其平和를企圖코져홈이아니라,오즉他日武備의準備的思想에出홈인져.	③故ビスマーク公は寔とに歷代の人豪也。彼の未だ起たざるに當つてや、紛々として分立せる北部日耳曼の諸邦は、同一言語の國民は必ず結合せざる可らずとせる帝國主義者の眼光より之を見ば、實に憫れむに堪たる者なりき。而して能く是等諸邦を打て一丸とせるビスマーク公の大業は、其光輝を千載に放てり。然れども〈知らざる可らず〉、彼等帝國主義者が諸邦を結合統一するの目的は、必しも之に依て實際に諸邦の平和と利益を冀ふに非ずして、唯だ其武備の必要より生じ來れる者なるを。〔ビスマーク公〕
自由平等의義理를咀嚼ᄒᆞ고,法國革命의壯視을希望ᄒᆞ든人士의一心에以爲ᄒᆞ되,蠻觸의爭을暫止ᄒᆞ고,平和의福利를永享ᄒᆞ며,外敵의侵寇를備防ᄒᆞ야日耳曼의結合統一을企望ᄒᆞ얏시니,是可望也커든孰不可望也리오.實際의歷史를試觀컨ᄃᆡ,決코此種企望에副된者ㅣ無ᄒᆞ니,嗚呼奈何오.	④〈彼の早く〉自由平等の理義を咀嚼して、佛國革命の壯觀を羨望せるの人士に在ては、其觸蠻の爭ひを止めて協同平和の福利を享け、且つ外敵の侵寇に備ふるが爲めに、日耳曼の結合統一を企望するもの有りしや明か也。是れ甚だ可也。然れども實際の歷史は決して此種の企望に副はしめざりしを奈何せん。
若日耳曼을統一ᄒᆞᄂᆞᆫ거시果然北部日耳曼諸邦의利益이되면,彼等이何不以多數德義志語而結合澳大利乎아.所以不爲此者ᄂᆞᆫ俾士麥克公一輩의思想이決고德義志一般人民에不在ᄒᆞ고,又ᄂᆞᆫ共同平和福利에不在ᄒᆞ야,다만普	⑤若し日耳曼統一が、眞に北部日耳曼諸邦の利益の爲めに成されたりと言はゞ、彼等は何ぞ其多數が獨逸語を話するの澳太利と結合するを爲さゞるや。之を爲さゞる所以は他なし、ビスマーク公一輩の理想は決して一般獨逸人〈のブラザーフ

魯士와다못自身의權勢與榮光에在할而已니,	ード〉に在らざれば也、〈諸邦〉共同の平和の福利に在らざれば也、唯だ普魯西彼れ自身の權勢と榮光に在りたれば也。〔日耳曼統一〕
夫徹始徹終ᄒᆞ고,但以好戰之心으로滿足ᄒᆞᆫ手段을周旋ᄒᆞ야,써結合提携를求ᄒᆞᄂᆞᆫ거슨是人의〈動物的〉常性이니,〈悲夫也로다〉.(未完④) 論愛國心(續) 夫甲을만일親暱ᄒᆞ면乙은반다시憎惡ᄒᆞ나니,彼를愛ᄒᆞᄂᆞᆫ者ᄂᆞᆫ此를憎ᄒᆞᄂᆞᆫ緣故이라.若是ᄒᆞ게終日토록擾々ᄒᆞ야安寧ᄒᆞᆫ餘暇가無ᄒᆞᆷ은其覇權을誇揚코져ᄒᆞᆷ이니,盖俾斯麥公과如ᄒᆞᆫ俊才로是等의情態를읏지不知ᄒᆞᆷ에實ᄒᆞ리오.故로如此ᄒᆞᆫ國民의動物的天性을利用ᄒᆞ야其手腕을試着ᄒᆞ야시니,若欲責言인ᄃᆡ,無非彼等國民의愛國心을煽揚ᄒᆞ야所謂愛國宗을創建코져ᄒᆞᆷ으로無用의戰爭을挑發할而已로다.	⑥夫れ徹頭徹尾好戰の心を滿足するの手段として結合提携を求むるは、是れ人の常性也。甲の朋友たるは乙の仇敵たるが故也、彼を愛するは此を憎むが爲め也、彼の外國てふことの爲めに念慮を勞するは、其安寧を欲するが故にあらずして、其覇權を誇揚せんと欲して也。俊才ビスマーク公は能く這個の人情に曉通せり。彼は實に此國民の動物的天性を利用して、其手腕を揮ひ來れる也。換言すれば彼は國民の愛國心を煽揚せんが爲めに敵國と戰へる也、自家に反對する諸種の理義評論を壓伏して、其希望せる愛國宗を創建せんが爲めに、無用の戰爭を挑發したる也。〔無用の戰爭〕
故로彼日耳曼의統一ᄒᆞᆫ者ᄂᆞᆫ其獸力을實由ᄒᆞᆷ이니,盖亞波士德路ᄂᆞᆫ鐵血政策의祖師이로되,其深謀遠計의第一着手者ㅣ只與寂弱의隣邦으로苦戰而大捷ᄒᆞᆷ을因ᄒᆞ야,於是에國民中에迷信虛榮의獸力을喜ᄒᆞᄂᆞᆫ徒黨이其羽翼에競附ᄒᆞ야,必竟德義志新帝國의結合과帝國主義의發程만될而已로다.	⑦然り彼れ日耳曼の統一者、獸力のアポストル、鐵血政策の祖師は、其深謀遠計の第一着手として、恣まに最弱の隣邦と戰へり。而して之に捷つや、國民中、迷信、虛榮、獸力を喜ぶの徒は、競ふて彼れの黨與となれり。是れ實に新獨逸帝國の結合、新獨逸愛國主義の發程なりき。
其第二策으로言之면,其餘의隣邦으로더부러挑戰ᄒᆞ얏시니,此隣邦은前의隣邦에比較ᄒᆞ야稍强ᄒᆞᆫ者나,雖然이나彼等이敵備의不完ᄒᆞᆷ을窺視而乘勝ᄒᆞ야,비로소所謂愛國心과結合的精神이油然而生ᄒᆞ야,新戰場의興隆이日盛ᄒᆞ니,其運動의原因은俾公自身의國과밋同國々王의膨脹ᄒᆞᆫ慾火로써一時利用과指揮의巧妙할而已로다.	⑧第二に彼は他の隣邦に向つて挑戰せり。此隣邦や前の隣邦よりも强かりき、然れども彼は敵の備への完たからざるに乘せし也。而して所謂愛國心と所謂結合の精神は油然として、此新戰場より降興せり。而して其運動は一にビスマーク公自身の國〈たる普魯西〉と及び同國王の膨張の爲めに、巧みに利用せられ妙に指揮せられたりし也。
然則決코純然ᄒᆞᆫ正義의意味가아니라,全然히一個人의野心的公名心으로國民의虛誇迷信을利用ᄒᆞᆫ結果가不其然歟아.	⑨彼は決して純乎たる正義の意味に於て、北日耳曼の統一を企てし者に非ず。【彼は決して普魯西てふ一物を結合の中に溶化し湮滅するを許さゞる也。彼の許す所は唯だ普魯西王國を盟主と爲すの統一のみ、普魯西王をして獨逸皇帝[ｶｲｾﾞﾙ]の榮光を冠せしむるの統一のみ。誰か言ふ、北日耳曼の統一は國民的運動也と、】彼等國民が虛誇と迷信の結果なる愛國心は、全く一人の野心功名の爲めに利用されたるに非ずや。〔普魯西てふ一物〕
雖然이나其原因인즉,中古時代의理想으로做出ᄒᆞᆷ이니,何則고.若俾斯麥公者도當初未開人의理想을利用ᄒᆞ야腐陳野蠻의計劃으로竟能成功ᄒᆞ야시니,其時社會에多數ᄒᆞᆫ道德的이니心理的이니互相主唱ᄒᆞᄃᆞᆫ者도오히려中古時代의境遇를未免ᄒᆞ야거든,而况一般國民의普通知識이읏지未開ᄒᆞᆫ譏課[⇒訶]를免ᄒᆞ리오.是以로彼等은不過自欺而欺人이라ᄂᆞᆫ評論이近世科學家口頭로釀出ᄒᆞᆷ을不免이로다.	⑩ビスマークの理想や、實に中古時代未開人の理想たるを免れず。而して彼が其陳腐野蠻の計画にして能く成功するを得たる所以の者は、社會の多數が道德的に心理的に、未だ中古時代の境域を脱出すること能はざるに由るのみ。然り多數國民の道德は猶ほ中古の道德也、彼等の心性は尚ほ未開の心性也、唯た彼等自ら欺き人を欺かんが爲めに、近世科學の外皮を以て掩蔽するに過ぎざるのみ。〔中古時代の理想〕
	【⑪彼や既に無用の師を起すこと二回、能く成功せり。而して第三回の師を起さんが爲めに、孜々として鋭を養ひ耽々として其機を待てり。機は到れり、彼は再び他の强國の備への完たからざるに乘ぜり。嗚呼普佛の大戰爭。此戰や危道の尤も危なる者、兇器の尤も兇なる者、而も彼れビスマークに在

	ては大成功。〔普佛戰爭〕】
故로普法戰爭의捷後狀況을視察할진ᄃᆡ,北日耳曼諸邦이普魯西足下에拜跪ᄒᆞ고,其他諸邦이普魯西國王을崇奉ᄒᆞ야,德意志皇帝되기를奉祝ᄒᆞ야시니,此乃戰後結果也라.읏지俾公眼中에同盟國民의福利가有ᄒᆞ다謂ᄒᆞ리오.	⑫普佛戰爭は、北日耳曼諸邦をして普魯西の足下に拜跪せしめたり、彼等諸邦をして一齊に普魯西國王獨逸皇帝を奉祝せしめたり。唯だ普魯西國王の爲め也、ビスマークの眼中之れ有るのみ、豈に同盟國民の福利あらんや
是以로自吾斷之컨ᄃᆡ,德意志의結合이正義上好意同情으로써成立홈이아니라謂할지니,其國民의積屍踰山ᄒᆞ고,流血成海ᄒᆞ야,如鷙鳥焉ᄒᆞ며,如猛獸ᄒᆞ야써,其統一의事業을成立ᄒᆞᆫ者ᄂᆞᆫ〈果何由而生也오.一則彼國民이〉敵國을對ᄒᆞᄂᆞᆫ憎惡心을煽揚홈을由ᄒᆞ고,〈一則彼社會가〉戰勝을待ᄒᆞ야,虛榮的에炫醉홈을由홈이니,世界의仁人君子가읏지痛心疾首ᄒᆞᄂᆞᆫ自然心이能無乎아.	⑬故に我ハ斷ず、獨逸の結合は正義なる好意同情に由るに非ざる也。獨逸國民が屍の山を踰へ血の流を渉ると、鷙鳥の如く野獸の如く、以て其統一の業を擧げたるは、唯だ敵國に對する憎惡の心の煽揚されしに由るのみ、戰勝の虛榮に醉へるに由るのみ。是れ大人君子の與する所なる乎。
豈止於此리오.彼等多數의國民이〈如此ᄒᆞᆫ殘忍薄行을置ᄒᆞ야〉도리여自誇自伐ᄒᆞ되,是我德意志國民이上天의寵榮을享有라ᄒᆞ고,ᄯᅩ世界各國々民의多數가亦從而驚歎ᄒᆞ야曰偉哉라〈德意志여〉.爲國者ㅣ맛당이若是ᄒᆞᆫ後에可ᄒᆞ다ᄒᆞ니,〈悲夫인져〉.	⑭而も彼等國民の多數は自ら誇つて以爲らく、我獨逸國民が天の寵靈を享くる、世界各國孰か能く企及する者有らんやと。世界各國民の多數も亦た驚歎して曰く、偉なる哉、國を爲す者宜しく此如くなる可き也と。【日本の大勲位侯爵も亦隨喜して曰く、我も亦た東洋のビスマーク公たらんと。從來英國の立憲政治が世界に有せし光榮は、忽焉として去て普魯西軍隊の劒欄に移れり。】
國民이國威와國光의虛榮에醉홈이夫巳氏의俾斯麥公에게醉홈과恰如ᄒᆞ야,彼等醉ᄒᆞᆫ者가耳熱目昧ᄒᆞᆫ즁에意氣가勃々ᄒᆞ야,勇往直前ᄒᆞ야積屍如山ᄒᆞ야도不見其慘ᄒᆞ고,流血成海ᄒᆞ야도不知其穢ᄒᆞ야,다만其得意ᄒᆞᆫ一時虛榮을自鳴ᄒᆞ도다.	⑮國民が國威國光の虛榮に醉ふは、猶ほ個人のブランデーに醉ふが如し。彼れ既に醉ふ、耳熱し眼昧みて氣徒らに揚る、屍山を踰へて其慘なるを見ざる也、血河を渉りて其穢なるを知らざる也。而して昂々然として得意たる也。〔愛國的ブランデー〕
一柔術家와力士家가有ᄒᆞ야互相競爭ᄒᆞ야各其技術을秘藏ᄒᆞ나,然이나만일柔術家가力士가無ᄒᆞ면敵手가無ᄒᆞ리니,敵手가既無ᄒᆞᆫ즉,果然何利益이有ᄒᆞ며,果然何名譽가有ᄒᆞ리오.〈推此觀之면〉,德意志國民의所以自誇ᄒᆞᄂᆞᆫ者도오즉敵國의取홈인在ᄒᆞ니,만일敵國이無ᄒᆞ면,果然何利益과何名譽가有ᄒᆞ리오.	⑯〈國民が武力優れて戰鬪に長ずてふ名聲を得るは、猶ほ〉柔術家の免許皆傳を得たるが如し。力士の横綱を張れるが如し。柔術家や力士や唯だ其敵手を殪す耳、技此に止る耳、若し敵手なくんば、何の利益ある乎、何の名譽ある乎。獨逸國民の誇りは唯だ敵國を破る耳、若し敵國なくんば何の利益ある乎、何の名譽ある乎。〔柔術家と力士〕
國民이戰爭의虛榮에醉ᄒᆞᄂᆞᆫ者가其名譽와功蹟을自跨홈에不過ᄒᆞ니,彼等政治와經濟와敎育等諸般文明的福利에至ᄒᆞ야ᄂᆞᆫ誰가有ᄒᆞ야能히硏究할고.德意志의哲學과文學은尊崇치아니ᄒᆞ고,다만德意志의所謂愛國心만尊崇ᄒᆞ나니,吾輩ᄂᆞᆫ此에對ᄒᆞ야決코贊美치아니ᄒᆞ노라.(未完⑤)	⑰【柔術家と力士がブランデーに醉て、其技能と力量を誇るを見て、人は更に彼等の才智、學識、德行を信ずるを得べき乎。】國民が戰爭の虛榮に醉て其名譽と功績を誇るを見て、他の國民は更に彼等の政治、經濟、敎育に於ける文明的福利を與ふるを信じ得べき乎。獨逸の哲學は尊崇すべし、獨逸の文學は尊崇すべし、而も我は決して獨逸の所謂愛國心を贊美する能はず。
	【⑱今やビスマーク公の輔佐せる皇帝や、ビスマーク公彼自身や、皆な既に過去の人となれり。然れども銕血の主義は猶ほ現皇帝の頭上に宿れり、愛國的ブランデーは猶ほ現皇帝を醉しめつゝあり。現皇帝の戰爭を好み、壓制を好み、虛名の好むや、夐かに奈勃翁一世に過ぐ、更に夐かに奈勃翁三世に過ぐ、尨然たる大國民は今に於て、尚ほ血を以て購へる結合統一てふ美名の下に、此年少壓制家の驅使に甘じつゝある也。而して所謂愛國心は尚ほ甚だ熾ん也。然れども是れ豈に永遠の現象ならん哉。〔獨逸現皇帝〕】
論愛國心（續）	⑲見よ愛國心の弊毒は既に絶頂に達せり、マクベスの暴虐極

盖所述과如히愛國心의弊害가其極點을已達ᄒᆞᆫ즉,反動의力이突然而起ᄒᆞ리니,我恐其强敵이將有捲土而來者일가ᄒᆞ노라.然이나吾所謂强敵者ᄂᆞᆫ非迷信的이라實義理的也며,非中古的이라實近世的也며,非狂熱的이라實組織的也니,其目的인즉,其愛國宗과愛國的[⇒宗]의이른바事業을破壞ᄒᆞᆫ然後에乃已한지니,是ᄂᆞᆫ即近世社會主義을爲ᄒᆞᄂᆞᆫ바이니라.	まるの時に、森林の撼きて迫り來れるが如く、恐るべき强敵は既に土を捲て來れるに非ずや。此强敵や迷信的に非ず理義的也、中古的に非ず近世的也、狂熱的に非ず組織的也、而して其目的や彼愛國宗及び愛國宗の爲せる事業を盡く破壞するに在り。之を名けて近世社會主義と云ふ。〔近世社會主義〕
古代野蠻的及狂熱的의愛國主義가장ᄎᆞ近代高遠文明의道義與理想의壓伏되ᄂᆞᆫ빅가將至ᄒᆞ리니,如此ᄒᆞᆫ時代에ᄂᆞᆫ俾斯麥과如ᄒᆞᆫ事業을行코져ᄒᆞ야도再得키不可ᄒᆞ니,盖道義理想의制勝은即在現世紀의中葉ᄒᆞ야可決而待也니,故로德義志의社會主義가隆然勃興ᄒᆞ야將與愛國主義로爲激烈之抵抗ᄒᆞ리니,即彼惑於戰勝之虛榮ᄒᆞ고,醉於憎惡敵國之愛國心ᄒᆞ야一毫라도其國民을煽揚ᄒᆞ야與之同惰[⇒情]博愛케不能홈을斷可知也로다.	⑳古代の蠻野的にして且つ狂顛的なる愛國主義が、近代文明の高遠なる道義と理想を壓伏し去ること、今後も猶ほビスマーク公當時の如くなるを得るやは、現世紀の中葉を待て決す可し。而も獨逸の社會主義が隆然として勃興し、愛國主義に向つて激烈なる抵抗を爲せるを見ば、如何に戰勝の虛榮と敵國の憎惡より生ぜる愛國心が、一毫も國民相互の同情博愛の心に益する所なきを知る可らずや。
嗚呼라.極哲學的의國民으로써各政治的理想을具ᄒᆞ야非哲學的의事態를極演ᄒᆞ면,即俾斯麥의罪人만될뿐不是라,凡德意志를宗ᄒᆞᆫ歐洲列國의其文學家와美術家와哲學家及道德家의罪人됨을未免ᄒᆞ리니,其高尚ᄒᆞᆫ志意가何在而但爲狺々相噬ᄒᆞᄂᆞᆫ豺狼의態度ᄒᆞ야尚存於二十世紀之今日也오.	㉑吁嗚極めて哲學的[ﾌｨﾛｿﾋｯｸ]なる國民をして、各種の政治的理想中、極めて非哲學的[ｱﾝﾌｨﾛｿﾋｯｸ]なる事態を演ぜしめたるはビスマーク公の大罪也。ビスマーク公若し微りせば、獨り獨逸のみならず、獨逸を宗とせる歐洲列國の文學、美術、哲學、道德は、如何に進歩し如何に高尚なる可かりしぞ、曷んぞ狺々相喰む豺狼の態を、廿世紀の今日に存せんや。〔哲學的國民〕
	【其六　①日本の皇帝は獨逸の年少皇帝と異り。戰爭を好まずして平和を重んじ給ふ、壓制を好まずして自由を重んじ給ふ、一國の爲めに野蠻なる虛榮を喜はすして、世界の爲めに文明の福利を希ひ給ふ。決して今の所謂愛國主義者、帝國主義者に在らせられざるに似たり。然れども我日本國民に至つては、所謂愛國者ならざる者寥々として晨星也。〔日本の皇帝〕**】**
吾鑒夫東西古今의愛國主義컨ᄃᆡ,오ᄌᆞ敵人을憎惡홈으로써目的을作홈으로討伐에從事ᄒᆞ야曰是即愛國心의發揚ᄒᆞᆫ빅라自稱ᄒᆞ니,吾所不敢賛美者也로라. 是以로今日本人民의所謂愛國心이라홈을亦不能不排斥ᄒᆞ노라.	②我は斷して古今東西の愛國主義、唯た敵人を憎惡し討伐するの時に於てのみ發揚する所の愛國心を賛美すること能はざるが故に、亦た日本人民の愛國心を排せざる能はず。
吾試以〈日本〉前日의伯爵後藤象次郎의一事로擧言之ᄒᆞ리니,盖當時全國人民의愛國心을煽揚ᄒᆞ야大聲疾呼曰國家危急存亡之秋를當ᄒᆞ야不敢坐視라ᄒᆞ고,突然而起ᄒᆞ야曳裾廊廡ᄒᆞ야,大東團結ᄒᆞᆫ當時愛國士가倏然如春夢之無痕ᄒᆞ니,究其事實컨ᄃᆡ,當時日本之所謂愛國心이其實은爲愛伯心이니,是耶아,非耶아.	③故後藤伯は、曾て一たび日本國民の愛國心の煽揚を試みて、國家の『危急存亡』の秋なることを呼號せり。天下の愛國の士翕然として之に趨る、草の風に偃すが如くなりき。而して伯は突如として廟廊に曳裾せり、大同團結は消て春夢と一般也。當時に於ける日本人の愛國心てふ者は、其實愛伯心に非ざりし耶非耶。〔故後藤伯〕
若否則非愛伯也라.憎藩列政府也니,其所謂愛國心이直是憎惡心이라可謂홀지로다.盖同舟遇風ᄒᆞ면雖呉越이라도如兄弟ᄒᆞ니,此兄弟者ᄂᆞᆫ眞一歎美者也로다.	④否な後藤伯を愛するに非ざる也、藩閥政府を憎みたれば也。彼等の愛國の心は憎惡の心也、同舟風に遭へば呉越も兄弟たり、此兄弟や豈に賛歎を値ひする者ある乎。
日本人의愛國心者가至征清之役ᄒᆞ야,其發越坌湧이振古所未曾有者ᄒᆞ니,彼等이清人을憎惡ᄒᆞ야侮辱疾視ᄒᆞᆫ狀態ᄂᆞᆫ實非言語로所能形容者나,然이나其大概則白髮의翁媼으로自ᄒᆞ야三尺의嬰孩에至ᄒᆞ도록咸有殲殺四億生靈而後에甘心之慨ᄒᆞ니,靜言思之컨ᄃᆡ,寧非類狂이라.如餓虎然ᄒᆞ며如野獸然ᄒᆞ니,〈寧不悲哉아〉.	⑤日本人の愛國心は、征清の役に至りて其發越坌湧を極むる振古曾て有らざりき。彼等が清人を侮蔑し嫉視し憎惡する、言の形容すべきなし、白髮の翁媼より三尺の嬰孩に至るまで、殆ど〈清國〉四億の生靈を殺し殲して後甘心せんとするの慨ありき。虛心にして想ひ見よ、寧ろ狂に類せずや、寧ろ餓虎の心に似たらずや、然り野獸に類せずや。〔征清の役〕

彼等이果然日本國家及國民全體의利益幸福을希望ᄒᆞ야,眞個同情相憐의情義를抱含而然歟아.否則惟以多殺敵人으로爲快ᄒᆞ고,多奪敵財로爲快ᄒᆞ고,多割敵地로爲快ᄒᆞ야,其國民의獸力的卓越을世界에誇揚코져홈이아닌가.	⑥彼等果して日本の國家及び國民全體の利益幸福を希ふてふ、眞個同情相憐の念あつて然りし乎。否な唯だ敵人を殺すの多きを快とせしのみ、敵の財を奪ひ敵の地を割くの多きを快とせしのみ、我獸力の卓越せるを世界に誇らんと欲せしのみ。〔獸力の卓越〕
	【⑦我皇上の師を出し給ひしは、洵に古人の所謂荊舒惟れ膺ち戎狄惟れ懲さんが爲めなりしならん、眞に世界の平和の爲め、人道の爲め、正義の爲めなりしならん。而も如何せん、之が爲め煽起されたる愛國心の本質は憎惡也、侮蔑也、虚誇也。征清役の功果を以て如何に國民全般の有形無形を利すべきかに至つては、一毫想ひ及ばざりし所に非ずや。】
然則是役의結果가軍費의重資를富豪에게收恤（或五百金/或一千金）ᄒᆞ고,或은兵士가混沙礫而販鑵詰ᄒᆞ고,一面則軍人의死期를促ᄒᆞ고,又一面則商人의賄賂를索ᄒᆞ야以是로名爲愛國心이라ᄒᆞ니,誠足怪也로다.如斯히野獸的殺伐의天性이其狂熱至極之地位에達ᄒᆞᆫ時ᄂᆞᆫ,貫盈ᄒᆞᆫ罪惡이必有할것은亦必至之勢也라.是豈仁人君子의所可忍爲哉아.	⑧夫れ一面に於て五百金千金を恤兵部に獻せるの富豪は、一面に於て兵士に販るに砂礫を混するの鑵詰を以てす。一面に於て死を期せりと稱するの軍人は、一面に於て商人の賄賂を收むること算なし、之を名けて愛國心と云ふ。怪しむなき也、野獸的殺伐の天性が其熱狂を極むるの時、多くの罪惡の行はるゝは必至の勢ひなれば也。是れ豈に皇上の大御心ならん哉〔砂礫を混するの鑵詰〕
	【⑨日本の軍人が尊王忠義の情に富めるは眞に掬すべき有り。然れども彼等の尊王忠義の情が、文明の進歩と福利の増加に於て、幾何の貢獻する所あるやは問題也。〔日本の軍人〕】
	【⑩團匪の亂、大沽より天津に至るの道路險惡にして我軍甚だ艱む、一兵卒泣て曰く、我皇上の爲めにあらずんば、此艱苦に堪へんよりは寧ろ死するに如かずと。聞く者涙を墮さゞるなし。我亦之が爲めに泣く。〔我皇上の爲め〕】
	【⑪可憐の兵士、我は彼が皇上の爲めと言ふて、正義の爲めに、人道の爲めに、同胞國民の爲めにと言はざるを責めざるべし。彼れは平生其家庭に學校に兵營に於て、彼の一身が唯だ皇上に捧ぐべきことを教訓せられ命令せられて其の他を知らざれば也。スパルタの奴隷[ヘロツト]は自由あるを知らず、權利あるを知らず、幸福あるを知らず、其主の爲めに驅使され鞭撻され、而して戰に赴て死す、戰に死せずんば即ち其主に殺戮さる、自ら誇て以爲らく國家の爲め也と。我は史を讀んで常に彼等の爲めに泣けり、今此の心を以て亦我兵士の爲めに泣く。】
	【⑫然れども今はスパルタの時代に非ず、我皇上は自由と平和と人道を重んじ給ふ、豈に其臣子をしてヘロットたらしむるを希ひ給はんや。我は信ず、我兵士をして、皇上の爲めと言ふよりは、寧ろ進んで人道の爲め正義の爲めと言はしめば、是れ皇上の嘉納し給ふ所なるを、是れ眞に勤王忠義の目的に合する者なるを。】
譬言之컨ᄃᆡ,其父母兄弟의困厄을救ᄒᆞ긔爲ᄒᆞ야,或盜賊도되고,或娼妓도되야,身危名汚而其父母兄弟의家門에延累ᄒᆞ니,此를於中古時代에ᄂᆞᆫ或賛美ᄒᆞᆫᄇᆡ나,然이나文明道德으로規律컨ᄃᆡ,惟非其心跡而憫其愚昧ᄒᆞ야决코其非行을不恕ᄒᆞ나니,野蠻的愛國心과迷信的忠義心이其孝子的盜賊娼妓로더부러何異가有ᄒᆞ리오.	⑬父母兄弟の困厄を救はんが爲めに、或は盜を爲す者あり、或は娼婦となる者あり、身を危し名を汚し、延て其父母兄弟家門を累するに至る、中古以前に於ては是を賛美せり、文明の道德は、唯だ其心事を悲しみ其愚を憫れむも、决して其非行を恕せざる也。〈忠義の心や善し、皇上の爲めや善し、而も正義と人道は我知る所に非ずと言はゞ〉、是れ野蠻的愛國心也、迷信的忠義也、何ぞ彼孝子的娼婦盜賊と異ならん〔孝子

	的娼婦〕
	【⑭我は哀しむ、我軍人の忠義の情と愛國の心が、未だ甚だ文明高尚の理想と合せざるあるを、猶ほ甚だ中古以前の思想を脱せざる者あるを】
	【⑮彼等軍人が其忠義の情、愛國の心の旺なるに反して、同胞人類の爲めてふ同情の絶て之れ無きは、新聞記者待遇の一事に見るべし。北清の役、彼等が從軍の記者を遇するや、其冷酷を極めたりき。彼等は記者の食なきを省みざりき、記者の宿するに地なきを省みざりき、記者の病めるを省みざりき、其生命の危機なるを省みざりき、曰く是れ我關する所に非すと、而して之を嘲罵し之を叱斥する、恰も奴僕の如くなりき、恰も敵人の如くなりき。〔軍人と從軍記者〕】
	【⑯軍人は國家の爲めに戰ふと云ふ。從軍記者も亦我國家の一人に非ずや、同胞の一人に非ずや、而も之を愛護するの念なき何ぞ如此く甚しきや。彼等の所謂國家とは、唯だ皇上あるのみ、軍人自身あるのみ、其他を知らざれば也。】
	【⑰我四千万衆は領を引て我軍の安危如何を知らんと要し、足を翹て我軍の勝敗如何を聞かんと望む、從軍の記者が矢石を冒し死生の途に出入する者、豈に啻其新紙部數の加培するのみに在らんや、彼等は實に我四年万衆の渇想の情を満足せしめんと欲すれば也。而も軍人は之を以て無用となせり、其四千万國民に對する一點の同情なきを知る可らずや。】
	【⑱封建時代の武士は、國家を以て武士の國家なりとせり、政治を以て武士の政治なりとせり、農工商人民は之に與かるの權利なく又義務なしと思惟せり。今の軍人も亦た國家を以て、皇上及び軍人の國家なりと爲せる也、彼等は國家を愛すと云ふと雖も、其眼中軍人以外の國民あらんや。故に知る愛國心の發揚は、其敵人に對する憎惡を加ふるも、決して同胞に對する愛情を加ふる者に非ざることを。〔眼中國民なし〕】
	【⑲國民の膏血を絞りて軍備を擴張し、生産的資本を散して不生産的に消縻せしめ、物價の騰昂を激成して輸入の超果を來さしむ、曰く國家の爲め也と。愛國心發揚の結果は頼母しき哉。〔愛國心發揚の結果〕】
	【⑳多く敵人の生命を絶ち、多く敵人の地と財とを利して、而して政府の歳計は却て之が爲めに二倍し三倍す、曰く國家の爲め也と、愛國心發揚の結果は頼母しき哉。】
	【其七　①我は以上説く所に依て、所謂パトリチズム即ち愛國主義若くば愛國心の何物たるかを、略ぼ解し得たりと信ず。彼は野獸的天性也、迷信也、狂熱也、虚誇也、好戰の心也、實に如此き也。〔愛國心の物たる如此し〕】
	【②言ふこと勿れ、是れ人間自然の性情にして之れ有る遂に已むを得ざる也と。思へ自然より發生し來れる諸種の弊毒を防遏するは是れ正に人類の進歩ある所以に非ずや。〔人類の進歩ある所以〕】
	【③水は停滯して動かざる久しければ即ち腐敗す、是れ自然也、若し之を流動せしめ疎通せしめて以て其腐敗を防かば、是れ自然に忤ふとなして咎むべき乎。人の老衰して疾病に罹

	るは自然也、之に藥を投するは自然に忤ふとなして責むべき乎。禽獸や魚介や草木や、其生るゝや自然に委す、其死するや自然に委す、其進化し若くば退歩する亦た自ら之を爲すに非ずして自然に委するのみ。若し人自然に隨ふを以て能事畢ると爲さば、直ちに禽獸、魚介、草木のみ、人たるに在らんや。】
	【④人は自ら奮つて自然の弊害を矯正するが故に進歩ある也。尤も多く自然の慾情を制壓するの人民は、是れ尤も多く道德の進歩せる人民也、天然物に向つて尤も多くの人工を加へたるの人民は、是れ物質的に尤も多く進歩せるの人民也。文明の福利を享けんとする者は、實に自然に盲從せざるを要す。】
	【⑤故に知れ、迷信を去て智識に就き、狂熱を去て理義に就き、虛誇を去て眞實[トルース]に就き、好戰の念を去て博愛の心に就く、是れ人類進歩の大道なることを。〔進歩の大道〕】
	【⑥故に知れ、彼野獸的天性を逸脱すること能はずして、今の所謂愛國心に驅使せらるゝの國民は、其品性の汚下陋劣なる、況して高尚なる文明國民を以て稱す可らざる者なることを。】
	【⑦故に知れ政治を以て愛國心の犧牲となし、教育を以て愛國心の犧牲となし、商工業を以て愛國心の犧牲となさんと努むる者は、是れ文明の賊、進歩の敵、而して世界人類の罪人たることを。彼等は十九世紀中葉に於て一たび奴隷の域より脱出せる多數の人類を謬妄なる愛國心の名の下に、再び奴隷の域に沈淪せしむるのみならず、更に野獸の境に迄も陷擠せんとする者なるを。】
自吾斷之컨ᄃᆡ,文明世界의正義人道를維持코져할진ᄃᆡ,其愛國心의跋扈를必制ᄒᆞᆫ後에야可得ᄒᆞ리니,此를芟除淨盡ᄒᆞ기爲ᄒᆞ야今所謂軍國主義의罪惡을次號에揭載ᄒᆞ리라. (完⑥)	⑧故に我は斷ず、文明世界の正義人道は、決して愛國心の跋扈を許す可らず、必ずや之を苅除し盡さゞる可らずと。〈而も如何せん、此卑しむべき愛國心は、今や發して軍國主義[ミリタリズム]となり、帝國主義となつて、全世界に流行するを〉。我は以下更に進んで、軍國主義が如何に世界の文明を戕賊し人類の幸福を阻害せるかを見ん。〔文明の正義人道〕
論軍國主義	**第三章　軍國主義を論ず**
第一節 ○軍國主義의勢力--現今軍國主義의勢力이盛大ᄒᆞ야前古에無比ᄒᆞ니,已達其極點이로다. 列國이軍備를擴張ᄒᆞ기爲ᄒᆞ야其精力을竭盡ᄒᆞ고,其財力을消磨ᄒᆞ나니,是曷故焉고.夫軍備者ᄂᆞᆫ尋常의外亂과ᄌᆞ못內患을防禦할而已여ᄂᆞᆯ,何必若是其甚也오.彼等이一國의有形的無形的을盡擧ᄒᆞ야,軍備을擴張ᄒᆞᆫ犧牲의原料을作ᄒᆞ니,是ᄂᆞᆫ即其原因與目的을不省ᄒᆞᆫᄃᆡ서做出ᄒᆞ야,其原因된防禦과保護의二目的以外로濫出ᄒᆞ니, 〈亦一研究할大問題로다〉.	**其一**　①今や軍國主義[ミリタリズム]の勢力盛んなる前古比なく、殆ど其極に達せり。列國が軍備擴張の爲めに竭盡する所の精力や、消糜する所の財力や、勝て計量す可らず。夫れ軍備を以て唯だ尋常の外患若くば內亂を防禦するの具と爲すに止まらん乎、何ぞ必しも如此く甚しきを要せんや。彼等が有形的に無形的に一國を擧げて軍備擴張の犧牲と爲し盡して而も猶ほ省みさらんとする、其原因と目的は、蓋し防禦以外に在らざる可らず、保護以外に在らざる可らす。〔軍國主義の勢力〕
○軍備擴張의因由--無非一種의狂熱心과一種의虛誇心과一種의好戰的愛國心而已니,彼好事ᄒᆞᆫ武人은欲弄其韜略者而贊成ᄒᆞ고,彼供其軍糧及軍需의資本家ᄂᆞᆫ博一摑萬金의巨利者而贊成ᄒᆞ나니,英德諸國의擴張軍費者ㅣ實	②然り軍備擴張を促進するの因由は、〈實に別に在る有り。他なし〉一種の狂熱のみ、虛誇の心のみ、好戰的愛國心のみ。但た武人の好事にして多く韜略を弄するが爲めにするも〈亦之れ有り〉、武器糧食其他の軍需を供するの資本家が一摑萬金

因於此者가多矣라.然이나武人과資本家ᄂᆞ所以得逞其野心者가實爲多數故로,人民의虛誇的好戰的愛國心의發越이有以應其機者也니라.	の巨利を博せんが爲めにするも〈亦之れ有り〉、英獨諸國の軍備擴張に在ては是等殊に與つて力ありき。然れども武人や資本家や、能く其野心を逞くするを得る所以の者は、實に多數人民の虛誇的好戰的愛國心の發越の機に投じたれば也。〔軍備擴張の因由〕
是以로甲의國民은曰我本平和를希望ᄒᆞᆫ다ᄒᆞ고,乙의國民은曰非望의侵攻이有ᄒᆞᆫ境遇에야奈何오ᄒᆞ며,乙國이亦曰我本希望平和而甲國이有非望의侵攻에奈何오ᄒᆞ야,世界各國이皆同一辭ᄒᆞ니,眞是噴飯之極이로다.	③甲國民は曰く、我が平和を希ふ而も乙國民が侵攻の非望を有するを如何と、乙國民も亦曰く、我は平和を希ふ而も甲國民が侵攻の非望を有するを如何と。世界各國皆な同一の辭を成さゞるはなし、噴飯の極也。
	【④如此くにして各國民は、童男童女が五月人形、三月雛の美なるを誇り多きを競ふが如く、其武裝の精鋭と其兵艦の多きを競ひつゝあり。夫れ唯だ相競ふのみ、必しも敵國の來襲急なるを信ずるに非さる也、必しも外征を急要とするに非さるに似たり。事は兒戲に類す、而も恐る可き慘害は此裡に胚胎するを奈何せん。〔五月人形三月雛〕】
○平和ᄂᆞ夢想中美夢--莫魯多將軍이有言曰（世界의平和를希望ᄒᆞᆫ者ᄂᆞ殆若夢想이니,然以夢境論之면亦是美夢）吾則以爲平和의幽夢이라ᄒᆞ니.此非將軍의不知而然者오,亦非將軍의好個美夢을欲絶者也니,蓋將軍이既捷於法國ᄒᆞ야,五十億佛郎의償金을獲收ᄒᆞ고,馬路沙斯와羅林의二州를割取ᄒᆞᆷ을因ᄒᆞ야,法國의工商은卻駸駸然日進於繁榮ᄒᆞ고,德義志의市場은俄然히一大困頓挫敗를招ᄒᆞ야怫然赫然히憤氣가四溢ᄒᆞ니,是ᄂᆞ將軍美夢의結果가如是者也니,非幽夢也라,實迷夢也로다.	⑤故モルトケ將軍は謂らく、『世界平和の希望は夢想のみ、而も此夢や甚た美ならず』と。然り平和の夢は將軍に在ては醜ならん、將軍は實に美しき夢想者なりき。將軍が佛國に捷て五十億フランの償金とアルサス、ローレンの二州を割取せるにも拘らず、而も佛國の商工の却て駸々として繁榮し、獨逸の市場の俄に一大困頓挫敗を招けるを見て、怫然赫然として怒れるの一事は、是れ將軍が美しき夢の結果なりき。美しき夢の結果は甚だ醜ならずや。〔モルトケ將軍〕
○蠻人의社會學--既而오莫魯多將軍이再用武力ᄒᆞ야,法國을向ᄒᆞ야一大打擊을加ᄒᆞ야,武力의捷利로써國民의富盛을企圖ᄒᆞ얏시니,是ᄂᆞ將軍의政治的手腕이라.若是ᄒᆞᆫ心術로써二十世紀의理想으로崇拜코저ᄒᆞ니,吾恐其未可也로다.然이나吾人이何時에나蠻人의倫理學과蠻人의社會學界에始出ᄒᆞ야抵抗할ᄂᆞ지實用有憾者也로다.	⑥而してモルトケ將軍は再ひ美しき武力を以て佛國に向つて大打擊を加へ、〈彼をして衰敗起つ能はざるに至らんしめん〉と企圖せること屢はなりき。是れ一に武力の捷利を以て國民の富盛を期せんとするモルトケ將軍の政治的手腕也。若し這樣の心術を以て、二十世紀〈國民〉の理想として崇拜せざる可らずとせば、吾人何の時か能く蠻人の倫理學、蠻人の社會學以上に出るを得んや。〔蠻人の社會學〕
○小莫魯多의輩出--軍國主義의全盛ᄒᆞᆫ結果가莫魯多의現時理狀과다못模型에서莫過ᄒᆞ거ᄂᆞᆯ,小莫魯多의輩出이世界에徧滿ᄒᆞ야過江의名士가鯽의甚多ᄒᆞᆷ과如ᄒᆞ니,志士의可懼者也라.	⑦而も軍國主義全盛の結果として、モルトケ將軍は現代の理想となれり、摸型となれり。小モルトケは世界到る處に輩出せること雨後の春艸と一般也。東洋の一小國にも小モルトケは揚々として濶歩せり。〔小モルトケの輩出〕
	【⑧彼らは軍備制限を主唱せるニコラス二世皇帝陛下を夢想者[ﾄﾞﾘｰﾏｰ]也と嘲れり、平和會議を滑稽也と罵れり。彼らは常に平和を希圖すと説くの舌をもて、一面に於ては即ち軍備は美事也、戰爭は必要也と唱道す。我は其矛盾を責めざる可し、姑く社會が軍備と戰爭を要すと云ふの故を聽かん。】
第二節 ○(日本之)馬罕大佐--近日軍國의事로써世界에稱名ᄒᆞᆫ者此馬罕만如ᄒᆞᆫ者ㅣ無ᄒᆞᆫᄃᆡ,彼의著作ᄒᆞᆫ者가英美諸國의軍國主義를模型ᄒᆞᆫ者인ᄃᆡ,	**其二**　①近日軍國の事に通ずるを以て稱せらるゝ者、マハン大佐に若くは莫し。彼の大著作は英米諸國の軍國主義者、帝國主義者のオーソリチーとして、〈洛陽紙價爲めに貴きを致す〉、而して我國士人の亦之を愛讀する者多きは、其譯書の廣告の頻繁なるを見て知るべし。【故に軍國主義を論ずる者、先づ彼の意見を徵するは、便益にして而も義務なるを信ず。】〔マハン大佐〕

彼의軍備與徵兵의功德說이甚巧ᄒᆞ니,其言을左에略記ᄒᆞ노라. 軍備者ᄂᆞ經濟上에ᄂᆞ비록生業의萎靡가有ᄒᆞ야人民의生命課稅에不利ᄒᆞ點이有ᄒᆞ나,國家運命에對ᄒᆞ야ᄂᆞ決코軍備가無ᄒᆞ면完全치못ᄒᆞ다ᄒᆞ얏시니, 是ᄂᆞ一方面에姑就ᄒᆞ야其利益을見ᄒᆞ者이니라. 徵兵者ᄂᆞ年少國民을集合ᄒᆞ야兵役學校에入學케ᄒᆞ야,軀體로써組織ᄒᆞ共同的要素이니,故로軍備와徵兵의原素로由ᄒᆞ야軍國의主義를成立ᄒᆞ고,此主義로써國民의精神을發達케ᄒᆞ다ᄒᆞ야시니,自吾觀之컨ᄃᆡ,其論의達[⇒違]理됨이頗多ᄒᆞ도다.	②マハン大佐が軍備と徵兵の功德を説くや甚だ巧也。曰く軍備が經濟上に於ては生産を萎靡せしめ、人の生命〈と時間と〉に課税する等の不利〈若くば害毒〉に就ては、日々吾人の耳朶を聾せしむる所にして、新に説くの要なし。 然れども一方より之を見れば、其利益は〈其弊害を償ふて餘あらざる乎。彼長上權力の衰微し紀綱の弛廢する甚しきの時に方つて〉、年少の國民が〈秩序と服從と尊敬とを學習すべき〉兵役てふ學校に入り、其躰軀は組織的[ｼｽﾃﾏﾁｶﾘｰ]に發達され、克己や勇気や人格が、軍人の要素として養成せられんことは〈何の用なき乎。多數の年少が其閭里市街を去りて一團となり、高等の智識ある先輩に混して、其精神を結合し其働作を共同にすべきを教えられ、憲章法規の權力に對する尊敬の念を養はれて其家に歸らんことは、今日の如き宗教壞頽の時に於て何の用なき乎。見よ〉、初めて教練せらるゝ新兵の態度働作を以て、既に教練を經たる兵士が街上に群がれる時の容貌體格に比較し見よ、如何に其優劣の甚しきかを知るに足らん。軍人的教練は、他年活撥なる生計を營むに於て決して有害なる者に非ず。〈少くとも大學に於ける年月の費消よりも有害なる者に非ず。而して〉各國民が相互に其武力を尊敬[ﾚｽﾍﾟｸﾄ]するが爲めに、平和は益す確保され戰爭は其數を減じ、偶ま衝動[ｺﾝﾌﾘｸｼｮﾝ]の事あるも其經過は極めて急速にして其鎮定は極めて容易なる、是れ何の用なしとする乎。蓋し戰爭は百年以前に在ては慢性症の疾病たりしも、今日に於ては其起る極めて稀にして寧ろ急性の發作たり。故に急性的戰爭の發作に應ずるの準備、即ち善良なる原因の爲めに戰ふの心は、元より善美の事たるを失はずして、而して此心や兵士が傭兵たりし當時よりも、夐かに廣大旺盛なるを見る也、何となれば今や國民即ち兵士にして、単に一君主の奴隷たる者に非されば也。 マハン大佐の言巧ならざるに非ず、而も我は其甚だ論理に違へるを見る。〔軍備と徵兵の功德〕
○戰爭은如疾病--百年前戰爭은慢性症의疾病이러니,今日戰爭은急性的疾病이로다.蓋健康ᄒᆞ時代에急性發作에應할準備ᄂᆞ注意者의必要ᄒᆞ理由가되나,然ᄒᆞ나慢性과急性을勿論하고,學理로써治療할方法만研究ᄒᆞᄂᆞ것이適當ᄒᆞ고,決코急性的疾病을釀出홈은不可ᄒᆞ거ᄂᆞ,現今所謂軍國主義ᄂᆞ其疾病의原素를胚胎홈[과+]恰似ᄒᆞ도다. (未完⑦)	③【マハン大佐の所論を剖析すれば、曰く、戰鬪を習ふて秩序と尊敬と服從の德を養ふは、今日の如く權力衰微し紀綱弛廢するの時に當つて尤も急要也。曰く、然れども】戰爭は疾病也、百年前に於ては慢性症疾病なりき、今日〈は國民皆兵にして〉戰爭は〈減少せり、偶ま之れ有るも〉急性也、此健康の時に於て常に急性の發作に應ずるの準備及注意は必要也と。然らば則ち〈マハン大佐は、國民が戰爭てふ〉慢性病に罹れるの時代は、是れ秩序あり紀綱張るの時代にして、健康の時代は即『綱紀弛廢し』『宗教壞頽』するの時代と爲す者也。奇ならずや。〔戰爭と疾病〕
論軍國主義 (前號續) △權力의衰微와紀綱의癈弛--馬罕所謂權力衰微紀綱癈弛者ᄂᆞ蓋社會主義의發生을指ᄒᆞ다ᄒᆞ니,其言의妄은固不足論이어니와,借使現時와百年以前을比較ᄒᆞ면果孰爲紀綱癈弛也며,且令今日社會主義로試欲破壞其現社會의所謂秩序及權力인ᄃᆡ,則紀綱癈弛와宗教衰頽의結果와[⇒라]徵兵의制及軍人的教練으로果足以防遏乎아.恐未必	④マハン大佐が權力の衰微、紀綱の弛廢と云ふ者は、蓋し社會主義の活性を指す者也。其妄なるや言を須たず。然れども假に現時を以て百年以前に比して紀綱弛廢せりとせよ、假に社會主義者が現社會の所謂秩序と權力を破壞せんと試むるを以て、紀綱弛廢し宗教壞頽の結果なりとせよ、徵兵の制と軍人的教練は果して之を防遏することを得べき乎。乞ふ事實を見よ。〔權力の衰微と紀綱の弛廢〕

能其實事也리라.	
○革命思想의傳播--美國獨立의戰에法國軍人의赴援者ᄂᆞ其於大革命之事에其秩序ᄅᆞᆯ破壞ᄒᆞᄂᆞ動機ᄅᆞᆯ反助ᄒᆞ얏시니,此非其前轍歟아.嗚呼라.德意志軍人이巴黎에侵入ᄒᆞᆷ이 〈固云僥倖이나,而〉 其德意志諸邦의革命思想이若非此動이면,豈能傳播歟아.現時歐洲大陸의徵兵制가諸國의兵營을採用ᄒᆞᆫ者인ᄃᆡ,常出於社會主義의一大學校라,其現社會ᄅᆞᆯ對ᄒᆞ야皆其不平ᄒᆞᆫ動機ᄅᆞᆯ養成ᄒᆞᆷ이非較著ᄒᆞᆫ現狀歟아.吾人이社會的主義의思想隆成을希望ᄒᆞᄂᆞ바ᄂᆞ决코兵營을排除ᄒᆞᄂᆞᄃᆡ有意ᄒᆞᆷ이아니니,馬罕大佐의言으로論ᄒᆞ야도兵士의敎練은僅以服從敬長으로爲美德이라ᄒᆞ니, 〈世之君子가自有定論ᄒᆞ리라〉.	⑤米國獨立の戰に赴援せる佛國軍人は、大革命に於ける秩序破壞に與つて有力なる動機たりしに非ずや、巴里に侵入せる獨逸軍人は、獨逸諸邦に於ける革命思想の有力なる傳播者たりしに非ずや、現時歐洲大陸の徵兵制を採用せる諸國の兵營が、常に社會主義の一大學校として現社會に對する不平の養成所たるは、較著なる現象に非ずや。我は社會主義的思想の隆興を希ふ、而して之を養成すといふの故を以て、決して兵營を排斥する者に非ず。而もマハン大佐の言の如く、兵士の教練は長上に對する服從と尊敬の美德を養ひ得べしと云ふ〈の謬妄なるを知る可からずや〉。〔革命思想の傳播者〕
	【⑥然り、シーザーの軍隊は、幾何か其國家の秩序に向つて尊敬の心を有せしや、クロムエルの軍は、初め彼等が國會の爲めに抜けるの劍を揮て、却て其國會を覆えせしにあらずや、彼等は唯だシーザー、クロムエルあるを知れるのみ、國家の秩序紀綱あるを知らざる也。】
○人民이軍人的--敎鍊을受ᄒᆞᄂᆞ者의最良善ᄒᆞᆫ目的은僅爲戰爭之事乎아,抑爲應其急性的疾病而治療乎아.彼等百年之間에其治療의期ᄅᆞᆯ待ᄒᆞ자면,悠然長遠ᄒᆞ야將以敎練으로始ᄒᆞ야亦以敎練으로終ᄒᆞ리니,果是能堪耶아否耶아.若否則必一日이라도此疾의發生이無ᄒᆞᆫ後에야能히甘心ᄒᆞ리라.	⑦人の軍人的教練を受くる、單に善良の目的に向つて戰ふが爲め乎、即ち所謂急性疾病の治療に應ずるが爲め乎。若し果して如此くなりとするも、彼等は百年此治療の期を得ずんば、悠然として長く其教練を以て始め教練を以て終ふるに堪ふ可き耶、否な必ずや自ら此疾病を發生せしめて以て甘心せんとする也。〔疾病の發生〕
○徵兵制와戰爭數--國民이皆兵이면,非但君主의奴隷만僅免ᄒᆞᆯ ᄲᅮᆫ아니라,各國民人이互相武力을尊敬ᄒᆞ야,則戰爭이減少ᄒᆞᆫ다ᄒᆞ니,其謬妄이尤甚ᄒᆞ도다.古代希臘과伊大利者ᄂᆞ非國民이皆兵이며,亦非君主之奴隷乎아.至若慢性症의戰爭ᄒᆞ야ᄂᆞ,彼傭兵으로써弱國을征伐ᄒᆞᄂᆞ故로到底히徵兵의便利만不如ᄒᆞ나,然國民皆兵의制ᄂᆞ戰爭의未發을防禦ᄒᆞᄂᆞ故로戰爭이因ᄒᆞ야減少ᄒᆞᆫ다ᄒᆞ나,則殊不然ᄒᆞ니,拿破崙의戰으로自ᄒᆞ야徵兵이已有ᄒᆞ야近代歐洲之奧法戰爭과克利美亞戰爭과奧普戰爭과普法戰爭과俄土戰爭이非皆出於徵兵制之後而極其慘酷者歟아.	⑧故に國民皆兵にして王侯の奴に非ざるは洵に然り、然れども是を以て各國民相互に其武力を尊敬[ﾚｽﾍﾟｸﾄ]するが爲めに戰爭を減少すと云ふに至つては妄も甚し。古代希臘及び伊太利に於ては國民皆兵にして、必しも王侯の奴にあらざりき、而も戰爭は所謂慢性症なりしに非ずや。彼傭兵が弱國を征伐するに方つて、純然たる徵兵よりも便利なｺﾄは之れ有り、然れども國民皆兵の徵兵制は、決して戰爭を未發に防禦し若くば減少する者に非ず。奈勃翁の戰も徵兵なりき、近代歐洲の澳佛戰爭、クリミヤ戰爭、澳普戰爭、普佛戰爭、露土戰爭、頻紛として徵兵制の下に其慘を極めしに非ずや。〔徵兵制と戰爭の數〕
○反省利害--至若近時ᄒᆞ야互相匹敵의國이於戰爭의事實과其終局의速力이無非國民軍人的敎練의結果也며,且戰爭외[⇒의]慘酷과毒害의極點이未嘗不由於此ᄒᆞ니,試就道理ᄒᆞ야其利害ᄅᆞᆯ反省ᄒᆞᆷ이果如何歟아.	⑨若し近時の相匹敵すべき兩國間の戰爭が、其終局速かなりとせば、是れ國民の軍人的教練の完全なるが爲めに非ずして、戰爭の慘害極めて大なるに由るのみ、若くは人の道理を反省するの更に速なるが爲めのみ。
○戰爭減少의理由--夫自一千八百八十年以來로兩相匹敵强國의戰爭이亦殆絶迹ᄒᆞ니,是皆兩國民이互相尊敬之効力乎아.其結果의恐怖가不難洞見이니,惟狂愚者ᄂᆞ不悟其由來也라,	⑩若し夫れ一千八百八十年以來、相匹敵すべき强國間の戰爭殆ど跡を絶てるは、是れ兩國民が相互の尊敬にあらずして、唯だ其結果の恐怖すべきを洞見し、其狂愚なるを悟れるに由るのみ。【獨佛は其戰爭の共倒れに終ふ可きを知る、露帝は一等國と戰ふの結果が破産と零落[ﾙｰｲﾝ]なることを知る。】〔戰爭減少の理由〕
彼等이果然强國을爲ᄒᆞ야相爭ᄒᆞᆷ이아니라,徵兵의敎練으로써其尊敬心을養成ᄒᆞᆫ功果也며,彼等이果然其武力을亞細亞阿非利加에大用코져ᄒᆞᆷ이아니라,自己의虛榮心과好戰心의野獸的天性에不過ᄒᆞ야軍人的敎練을依ᄒᆞᆫ後에야	⑪彼等强國の相戰はざるは之が爲めのみ、徵兵の教練が尊敬心を養成せるの功果に非ざる也。見よ彼等は今や大に其武を亞細亞、阿弗利加に用ゐんとするに非ずや。然り彼等が虛榮の心、好戰の心、野獸的天性は却つて軍人的教練に依て熾に

其煽揚이愈熾홈이라.	煽揚せられつゝある也。
第三節 ○戰爭과文藝--彼等이倡國民主義者가曰ᄒᆞ되,鐵은水火의鍛鍊을經ᄒᆞᆫ後에야犀利의劒을成ᄒᆞ고,人民은戰爭의鍛鍊을經ᄒᆞᆫ後에야偉大의國民을成ᄒᆞ며,美術也科學也製造工業也ㅣ若非戰爭의鼓舞激刺면,其高尚의發達이亦稀也라. 故로古代文藝興隆의時代도ᄯᅩᆫ戰爭의結果에屬ᄒᆞᆫ時代가多有ᄒᆞ니,〈古代歷史上에班班可考者여니와〉,英國의主倡軍國主義에至ᄒᆞ야도皆經戰爭而後에隆盛ᄒᆞ얏고,	**其三**　①軍國主義者は曰く、鐵が水火の鍛錬を經て犀利の劍となるが如く、人は一たび戰爭の鍛錬を經ずんば决して偉大の國民たるを得ず。美術や科學や製造工業や、戰爭の鼓舞刺激なくして能く高尚なる發達を爲すは稀也、古來文藝の大に隆興せるの時代は、多くは是れ戰役後の時代に屬す。〈ペリクレスの時代は如何、ダンテの時代は如何、エリザベスの時代は如何と。我は平和會議の主唱せられし當時〉、英國の軍國主義者の有力なる一人が此説を爲せるを見たり。〔戰爭と文藝〕
其他文學의興隆도因得戰爭의餘澤ᄒᆞ고,彼等文學도亦因戰爭而急速發達故로,彼等所謂文藝와戰爭이關聯一貫ᄒᆞ야雙行不悖라ᄒᆞ니,是則未免牽强附會之甚也로다.	②【然りペリクレスやダンテやエリザベスの時代の人民は皆な戰爭を知れり。然れども古代の歷史は殆ど戰爭を以て充填す、戰爭を經たるは特り此等の時代のみに非さるなり、】其他の時代も亦之を經たる也、豈に彼等の文學が一に戰爭の餘澤といふを得べけんや。故に彼等の文學が戰後急速に隆興せる乎、若くは彼等が戰爭に關聯せる一貫の特徵あるを證するに非ずんば、未だ牽强附會たるを免れさる也。
○古代希臘의列邦中에好戰而長於戰者ㅣ莫如斯巴爾達而彼果有一技術, 文學, 哲理, 等의傳播耶否아.（未完⑧）	③古代希臘の諸邦中、戰を好み戰に張ぜるはスパルタに如くは莫し。而して彼れスパルタや、果して一の技術や文學や哲理の傳ふべき者ある耶。【英國ヘンリー七世及びヘンリー八世の朝は是れ猛烈なる内亂相踵けるの後なりき、而も文藝の發達毫も見るべきなきに非すや。エリサベス時代の文學復興は遠くアルマダ戰爭の以前に兆せる者にして而してスペンサーやセークスピアやベーコンは决して此戰爭の爲めに出つるといふを得さる也。】
	【〔歐洲諸國の文藝學術〕○三十年戰爭は獨逸の文學科學をして、一たび消沈萎靡せしめ了りし也。ルキ十四世即位當時に盛なりし佛國の文學科學は、彼の黷武に依て衰微を極め、更に其晩年に至つて復興し來れる也、而して佛國の文學派その戰勝の時代よりも其困敗の時代に於て常に盛なりしを見ずや。近代英國のテニソン、サッカレーの文學、ダルウィンの科學を以てクリミヤ戰爭の勝利に歸すとせば、誰か之を笑はざらん。近代露國のトルストイ、ドストエフスキー、ツルゲネフの文學を以てクリミヤ戰爭の敗北に歸すとせば、誰か之を笑はざらん。獨逸の諸大家は、普佛戰爭の後に出でずして前に出ず、米國文學の全盛期は内亂の後に在らずして前に在り。】
	【〔日本の文藝〕○我日本の文藝も、亦奈良平安に盛にして保元平治に衰へ、北條氏の小康を得て僅かに復興の運に向へるも、元弘以後南北朝より應仁の亂を經て元龜天正に至るの間、殆ど湮滅に歸し、唯だ五山の僧徒に依て一縷の命脈を持したることは、少しく史を讀む者の首肯する所也。】

＊上記対照表における記号「訳文中强調」（訳文中引用文）(訳文原注)、『原文中引用文』は、元来の通りであり、このほか〔原文頭書〕、［原文ﾙﾋﾞ、訳文の誤字⇒、脱字＋、衍字－］、〈訳されていない原文語句、補足追加された訳文語句〉、【訳されていない省略原文】は権による。

＊下線は、対照確認が要すると思われる部分に、二重下線は、固有名詞と片仮名用語に付した。

＊韓国訳原文には句読点「,」と「.」がない。便宜のために、これらの句読点を付した。